

水の文化

その先の藍へ



自然のエレガンス

写真家 映像人類学 多摩美術大学情報デザイン学科教授

港千尋

ひとしずく



かれこれ30年ほど前になるが、ユベール・ド・ジヴァンシー氏をパリのアトリエに訪ねたことがある。20

世紀を代表するファッションデザイナーのひとりであり、フランス人にとって「ジヴァンシー」の名は、エレガンスの代名詞だった。でも具体的にそれは何なのだろう。わたしのやや直截な質問を受けて、ジヴァンシー氏は、自分がエレガントと感じるのは馬に乗る人の身ぶりだと答えた。オードリー・ヘップバーンが馬上でぐっと背筋を伸ばす凛とした姿が浮

かんでくる。では服ではどうでしょう。しばらく考えて彼はマリンブルーの服、と答えた。

わたしはその日たまたま紺のジャケットを羽織っていたが、それが理由ではあるまい。ブルーはフランスでもっとも好まれる色である。現代フランスの色彩論を代表するミシェル・パストウロー著『青』には、時代と社会の変遷を超えていかにブルーが国民色となるに至ったかが、明快に語られている。だがジヴァンシーが「マリンブルーの服」に究極の

エレガンスを認める理由は、おそらく彼が一生涯職人^{アルティザン}を貫いたことと関係がある。それは「日々の活動」に結びついた色なのである。

日本人としても納得のいく答えだった。藍色ほど日本人の生活に密着した色はないだろう。着物に浴衣、手ぬぐいに風呂敷。夏は涼しく、冬は温かい木綿の色。子どもの頃からわたしは剣道を習っていたので、藍染め道着には特別な感覚があり、濃い藍色はいまも竹刀の音と結びついている。だがジヴァンシー的な意味でのブルーがもっとも美しかったのは、野良着、仕事着の世界にちがいない。それは自然を前にした人間の永きにわたる活動の色である。

もっとも同じブルーが、フランスと日本ではかなり差異があることも事実だ。わたしは『フランスの色景』という本で、写真から色名を抽出す





フランス大西洋岸にある世界遺産モン・サン＝ミシエルの大階段からの眺め。島に夕暮れが訪れると、空と海が美しいブルーのパレットをつくる。『フランスの色景』より 撮影：港 千尋

るソフトを使い、色名と色彩の分布を比較してみた。日本との差は歴然で、たとえばピンクやムラサキ系の色名は、フランスのほうが圧倒的に豊かである。逆にグレー系統には、和名のほうに微妙な表現が多い。日本の伝統色には植物起源のものが多く、ブルー系統のフランス語には、鉱物や使用の歴史に由来するものがある。「ジニム」もそのひとつである。

もともと南仏の都市ニーム産のサージ生地由来と言われる。インディゴ染めの経糸を使った生地の名称だが、それがジーンズと同義語になり、さらに色の名として定着してしまうほどの大流行になった。ジニムを身につけた若者たちの姿は、特に1968年に宇宙から撮影された一枚の写真、アポロ8号の宇宙船から見た月面の彼方に浮かぶ青い地球のイメージと重なり、まさにグローバルな環境意識を生むことになった。地球はブルーに染め上げられたと言えるかもしれない。だが21世紀の現在、かけがえのない「生命の星」の色は、そこで活動するわたしたち人間に、果たしてエレガンスがあるのかどうかと、問うているような気がするのである。

港 千尋（みなとちひろ）

1960年神奈川県生まれ。「群衆」「移動」などをテーマに写真を撮りながら多彩な評論を行なう。写真展「市民の色 chromatic citizen」で第31回伊奈信男賞受賞。2007年イタリアで行なわれたヴェネツィア・ビエンナーレで日本館コミッショナーを、2016年のあいちトリエンナーレ2016では芸術監督を務める。主な著書に『記憶』（講談社 1996）、『パリを歩く』（NTT出版 2011）、『革命のつくり方』（インスク립ト 2014）、『フランスの色景—写真と色彩を巡る旅』（編著／青幻社 2014）などがある。

特集 その先の藍へ

水の文化55号 2017年2月

私たちの身のまわりにはさまざまな色がある。では「水」を色で表すと何色なのか。すぐに思い浮かぶのは「水色」だろう。水色は青系統の色だ。その青系統の色のなかでも、特に庶民の暮らしに多く用いられたのは藍色である。

明治時代の初めに日本を訪れたロバート・ウィリアム・アトキンソンが、藍色の衣服を身につけた日本人を数多く目にして、「ジャパン・ブルー」と称したのは有名な話だ。外国人の目に印象深く映った藍色は、日本人の生活を彩る代表的な色だったのだ。

あまり知られていないが、藍色には非常に多くの種類がある。今は藍色といえど濃いめの紺色をイメージするかもしれないが、「水色」「はなだ縹色」「かめのぞ甕覗き」「みずあさき水浅葱」といった淡い色も藍色の範疇に含まれる。

明治時代中期に合成藍が輸入されるまで、日本の藍色は蓼藍たぐらひを発酵させてつくる「すゐ染」という染料を用いて染められ、色の濃淡は染める回数などで調整していた。先人たちがさまざまな技術と工夫で多様な藍色を生み出したように、今も藍色にこだわったものづくりを続ける人たちがいる。藍色には日本人特有の何かがあるのだろうか。識者、そして藍をものづくりに活かしている現場を訪ね歩いた。

目次

巻頭エッセイ

ひとしずく

2 自然のエレガンス

港 千尋

特集 その先の藍へ

総論

6 日本に溢れる自然が多彩な藍色を育んだ

竹内淳子

藍ミニ図鑑

10 日本の藍・藍染め略年表

編集部

Interview

12 色と文化と心——色彩嗜好の国際比較から

齋藤美穂

現場 1

15 藍染め新世代「BUAISOU」の挑戦

BUAISOU

現場 2

20 時を刻む木曾漆と有田焼の「藍」

コスタンテ

現場 3

24 日本の「青」で世界に通用するジーンズを

株式会社ジャバンブルー

現場 4

28 淡い色から濃い色まで自在に染められる「日本の藍」

リンダ・ブラシントン

Interview

32 浮世絵における「藍」の存在感

松嶋雅人

文化をつくる

35 暮らしに根づいた日本の「藍」

編集部

連載

水の文化書誌 46

36 イギリスの川と水

古賀邦雄

食の風土記 7

38 こたつで食べる冬の風物詩 でっち羊かん

魅力づくりの教え 7

40 水・舟運そしてパーソナルネットワーク資本へ

山形県長井市

中庭光彦

Go! Go! 109 水系 12

45 大地を削って「遠回り」する肱川

坂本貴啓

50 センター活動報告

51 編集後記／ご案内

(敬称略)

日本に溢れる自然が 多彩な藍色を育んだ

明治時代に来日した外国人が「ジャパン・ブルー」と絶賛した「藍色」は「甕覗き」と呼ばれる淡い藍色から、黒く見えるほどの濃紺まで、実にさまざまなバリエーションがある。そこには日本人のどんな感性が働いていたのか。全国の藍染めにまつわる地を歩いて『藍―風土が生んだ色』『藍Ⅱ―暮らしが育てた色』を上梓した民俗学者の竹内淳子さんに、藍染めの起源を含めて「藍と日本人」についてお聞きした。

古代エジプトまで

遡る藍染めの歴史

水色、浅葱色、空色、露草色、縹色、紺色など、藍にはさまざまな色があります。これら美しい藍の色を生み出すのは、藍色の色素を含む含藍植物です。藍色の色素をもつ植物は、枯れても葉が藍色をしているので識別できます。

藍染めに用いられる含藍植物は世界に広く自生し、また栽培されていますが、日本では主にタデ科の一年草の蓼藍が用いられています。蓼藍はかなり昔に中国から日本へ渡来した染料植物です。また、沖縄や台湾、東南アジアではキツネノマゴ科の琉球藍が、インドを中心とした熱帯・亜熱帯地域ではマメ科のインド藍が、ヨーロッパではかつてアブラナ科のウォード（大青「たいせい」）が用いら

れていました。

藍染めの歴史は、紀元前2000年のエジプトに遡るといわれています。エジプトの古代都市テーベの古墳から出土したミイラに巻かれていた麻布が藍染めとされているので、含藍植物は葉をちぎって布にこすり付けても染まりますので、私は生葉染めだったのではないかと考えます。また、紀元前2〜3世紀にペルー中部の太平洋岸で栄えたパラカス文明の遺跡から、藍染めの木綿の布が出土しています。

その次は紀元前1世紀の中国です。儒教の経書の一つである『礼記』に「民ニ令シテ藍ヲ刈リ 以テ 染ムルコト 毋シム」とあります。民に令してとあるので「藍を刈らせるが、染めに使ってはならない」と藍染めを禁止したようです。藍は染料だけでなく薬用としても利用されていたので、そのための禁止ではないかと思えます。

もう一つ付け加えるならば、紀元後40年から70年ごろに成立したとされる、古代のインド洋近辺における海洋貿易について記した航海案内書『エリユトウラー海案内記』には、含藍量の高いインドの藍がカリカット（ゴージコードの旧称）から地中海方面



竹内 淳子 さん 民俗学者
たけうちじゅんこ

東京生まれ。大妻女子大学卒業後、同大学に勤務。現在、大学講師(専門は民俗学)。「ものと人間の文化を研究する会」主宰。各地への講演のほか、執筆活動が続ける。『藍一風土が生んだ色』(法政大学出版局1991)、『藍II—暮らしが育てた色』(法政大学出版局1999)など著書多数。また、『日本民俗大辞典 上巻・下巻』(吉川弘文館1999,2000)に分担執筆。

に輸出されていたと記されています。

少し遡りますが、紀元前3世紀の中国では、思想家・儒学者の荀子(じゆんし)が「青ハコレヲ藍ニ取りテ 藍ヨリモ青シ」と書き残しています。これはよく知られているように「出藍(しゆらん)の誉れ」ですね。藍草で染めた布は藍草よりも鮮やかな青色となることを弟子と師匠の関係にあてはめ、弟子が師匠の学識や技術を越えるという意味です。

このような痕跡を辿ることで、私たちは古代の藍のことをほんの少し知ることができます。

『万葉集』に見る日本の藍染め

では、日本の藍染めはいつ始まっ

たのでしょうか。「日本の植物学の父」と呼ばれる牧野富太郎は「藍は非常に古く日本に入ってきた植物だ」と述べていますが、「正確な年代はわかっていません。

奈良県天理市成願寺町にある古墳時代前期の下池山古墳から、鏡と一緒に絳青(じやうせい)縵(はん)という赤と青の絹織物が出土しました。この青は藍で染めたものとされていますが、こうした証拠はなかなか出てきません。そこで重要になるのが『万葉集』です。

実は『万葉集』には藍に関する句がいくつもあるのです。例えば「麻衣(あき)に青衿(あおくびつ)著(つ)け……」(九卷一八〇七)。この青衿とは、麻の着物の衿だけを絹にして、藍を生葉染めたものだと私は考えます。衿元が麻だと痛いのですから、絹にしたのではないでし

ょうか。絹は高貴なものだから庶民は着ないと思われていますが、そんなことはありません。絹は木綿よりずっと昔からあるのです。

「青によし奈良の山の……」(巻一七)や「青によし奈良山越えて」(巻二九)などは有名ですが、これは山の緑、つまり「青々とした緑」の意味で、藍とは関係ありません。「あたたかも似るか青きぬがさ」(二九卷四二〇四)という句は、藍を指すかどうかで文学者と意見が割れています。当時、傘は貴人が使うものでしたし、絹もまだ貴重品でした。ですから「青きぬがさ」とは「緑の木の下にいる状態」を指しているのかもしれないし、「青い絹の傘の下」という意味なのかもしれない。わからないのです。ですから「青衿」の句は貴

重なのです。

『万葉集』の成立時期には諸説ありますが、仁徳天皇の皇后磐姫(いわたひめ)の作といわれる歌から759年(天平宝字3)の伴家持の歌まで約400年にわたる全国各地、各階層の人の歌が収められています。私たちは学校で習う『万葉集』を身近なものと感じますが、実は『古事記』や『日本書紀』よりも古い文献なのです。

漢字ではない「染」は日本独自のもの

日本で藍染めがいちばん盛んに行なわれたのは、室町時代末期だったかもしれませんが。明(みん)から木綿(こゝろ)の種が入ってきたからです。麻よりも温かく、そして肌触りのよい木綿はどん

どん広がり、庶民も木綿の衣服が着られるようになりました。

1552年(天文21)に青屋四郎兵衛(徳島県)へやってきて、木綿と藍を一緒に栽培して人気を博します。

これは、四郎兵衛が「薬」と呼ばれる染料を用いたからだと言われています。

薬とは、蓼藍の葉を採って乾燥させて細かく切り、寝床(ねとこ)という土間に広げて寝かせて、水をかけながら発酵させる作業をおよそ90日続けてつくります。発酵させすぎると藍色の色素が傷むので、ひっくり返してまた水を打つ。春に種を蒔いて、まるで土のように見える薬が完成するのは12月から1月です。

薬は各地でつくられていましたが、特に阿波国の吉野川流域でつくられたものが質・量ともに秀でていたため「阿波藍」と呼ばれ、全国に出荷されていきました。

ここで注目したいのは薬という文字です。「草冠に染める」と書きますが、この文字は漢字ではなく国字です。つまり薬は大陸渡来のものでなく、日本人がつくったものなのです。ただし、いつ薬がつくられるようになったのかは詳らかではありません。



栃木県芳賀郡益子町にある「日下田(ひげた)藍染工房」の染め場。180L入る常滑焼の藍甕が72個並ぶ。藍甕に湯を張り、蓼藍からつくった薬、栄養分となるふすまや木灰などを入れると発酵が始まり、藍染めが可能になる。4個の藍甕の中央には「火床」と称する穴があり、籾殻などを燃やして温度を保つ。写真右は、藍甕にゆつくり布を浸けて色を染めている職人の小島卓磨さん(関連記事 pp.28-31)

せん。

「紺屋の白袴」の意味

薬は藍染めを専門とする「紺屋」が仕入れ、土のなかに埋め込んだ藍甕(あゐ)に発酵の栄養源となるふすまや木灰(ばい) (アルカリ)を入れ、1週間ほど発酵させます。この発酵は熟練を要する作業で、薬のインジゴ(注)を水溶性にして繊維にいったん吸着させて、再びインジゴに戻すことで染め



るのです。

藍染めが盛んになったのは、江戸時代に繰り返し出された幕府の奢侈(しゆし)禁止令の影響もありました。庶民は麻か木綿を着ることを強いられ、また光沢を帯びるような加工、そして紫色や紅梅色を用いることも禁じられました。天保の大飢饉のあとには白の木綿も禁止されるので、紺屋はますます増えていきます。険しい山のなかの村にも、かつて立派な藍甕をたくさん備えた紺屋がありました。

藍甕の染液は28℃が限度、できれば25℃がいいとされていますが、そうすると夏だけしか染めることができません。しかし、染液を28℃に保つために藍甕を四つ置き、その中心に籾殻などに火をつけて保温する方法を編み出したことで、冬期でも染めることができるようになりました。「紺屋の白袴」という言葉がありますね。紺屋が自分の袴は染めないで、いつも白袴をはいている——つまり「他人のことに忙しくて自分自身のこ

(注) インジゴ

本来はインドで栽培される含藍植物からとれる天然藍(インド藍)を指すが、そのなかに含まれる色素の物質名にもなっている。

かめのぞき
甕覗き

そらいろ
空色

みずいろ
水色

みずあさぎ
水浅葱

あさぎいろ
浅葱色

つゆくさいろ
露草色

はなだいろ
縹色

あいいろ
藍色

るりいろ
瑠璃色

こんじょう
紺青

かちいろ
勝色

こんいろ
紺色

こいあい
濃藍

のうこん
濃紺

とには手が回らないこと」のたとえとされていますが、実は紺屋が白い袴で仕事をしても染みはできません。藍染めは布や糸を藍甕へそつと下ろし、静かに引き上げるもの。飛び散るようにパシヤパシヤしたら、藍甕のなかのインジゴが弱って繊維に食いつけなくなるのです。つまり、染液を扱うけれど自分の白袴には染み一つつけないという「職人の意気」を表した言葉なのです。

「ジャパン・ブルー」と称された深く濃い藍色

1874年(明治7)に来日したお雇い外国人のロバート・ウイリアム・アトキンソンが藍染めの衣服を着ている日本人が多いことに驚いて、藍を「ジャパン・ブルー」と表現したことはよく知られています。たしかに藍染めは多かったと思いますが、アトキンソンが驚いた理由には「当時のヨーロッパではすでに天然の藍染めが失われていたこと」もあつたはずだと私は思います。

しかも、日本の藍染めは濃い藍が中心です。本来、藍の中間色は「縹」で、それよりも濃ければ紺色、薄ければ水色ですが、特に江戸時代の日本人は濃い藍、つまり紺色を好んで着ました。なぜでしょうか？ 農業でもっとも大事なのは豊作ですね。豊饒な世界を望むわけです。その世界は「藍を深く深く染めることで可能になるのではないか」と考えた。ですから藍色をどんどん濃くしていったのではないのでしょうか。

農作業をするときに土が付くので、汚れを目立たせないように、という工夫もあつたでしょう。今でこそ水色や空色はきれいな色とされていますが、そういった色だと汚れが目立つので田畑には入れません。だから濃い藍色を好んだのです。今の日本人が見ても、濃い藍色は安定したのに見えます。あるいは瞳の色も関係しているのかもしれませんが。例えば日本人から見るとヨーロッパの染織はきれいで華やかです。日本人の衣服は黒っぽくて渋い。渋いは地味とは違う深み

があります。濃い藍色を見ると「やっぱりの色が落ち着くわね」と感じるのが、日本人特有の感性なのだと思います。

藍色を育てた 列島の多彩な自然

蓼藍から効率よく色素を取り出して藍色に染めるために薬を生み出し、また藍甕を温める工夫で季節を問わず染められるようにした藍染めは、日本人の知恵の結晶です。また、江戸時代には藍染めの布を煮出して藍を回収し、煮詰めて棒状にした絵具「藍蠟」を書画や浮世絵などの彩色にも使うなど再利用もしてきました。

ところが今は薬から染めようとする人は少なくなっています。こうした文化をどう残すかは、私たち全員の問題だと思えます。薬を製造する藍師や藍染めの作家を人間国宝にすることも大事ですが、そうすると個人の問題に終始してしまふ。カギとなるのは、技をもつ人たちを地域で総合的に指定すること

です。例えば1974年(昭和49)に国の重要無形文化財に指定された沖縄県大宜味村喜如嘉の芭蕉布のような事例も必要でしょう。綿織物で藍染めが主体の久留米紬も総合指定されています。

私は藍色が好きで日本の各地を巡り歩き、本を書きました。「どの地域がよかったですか」とよく尋ねられますが、一つになんて絞れません。日本はどこに行っても美しいですね。雪深い北海道で雪のなかに手を入れたら、雪は水色に見えました。渚も薄い水色ですが、沖に行くにしたがつて濃い色になっていきます。沖繩で見た黒潮は、それはそれは深い藍色でした。今日は東京にいますが、空を見上げるときれいな空色ですね。南北に長く、海に囲まれた日本列島はさまざまな色で溢れています。今、藍という色をあらためて考えると、この日本の自然が淡い青色から紺色に近いほどの濃い藍色に至る多彩な表現を育ててきたのだと感じます。

(2016年12月2日取材)



総論

日本の藍・藍染め略年表

今号の特集に関する史料・資料および取材時に見聞きしたことから、日本の藍・藍染めに関する略年表と天然染料による「藍染め」についてまとめた。なお、藍・藍染めの歴史に関するまとまった史料・資料がないうえ、記述が異なる点も多いので、あくまでも参考程度としてほしい。(徳島県の藍染めにまつわる歴史については、「藍住町歴史館 藍の館」のご協力で同館の展示パネルおよび資料を参考とした)

時代	西暦	和暦	出来事	※紫アミ部分は国外の藍染め動向
紀元前2000年			エジプトの古代都市テーベの古墳から出土したミイラの麻布が藍染めとされる	
紀元前3世紀			中国の荀子(しゆんし)が「青ハコレヲ藍ニ取りテ 藍ヨリモ青シ」と書き残す	
紀元前2~3世紀			ペルー中部の太平洋岸で栄えたバラカス文明の遺跡から、藍染めの木綿の布が出土	
紀元前1世紀			中国の経書『礼記(らいき)』に藍染めを禁じた記述がある	
紀元前40~70年			インド洋近辺の航海案内書によると、このころインドの藍は地中海方面に輸出されていた	
古墳時代	4世紀中ごろ		下池山古墳から鏡と一緒に出土した赤と青の絹織物の青は、藍で染めたものとされる	
	400~450		渡来人たちから養蚕や製織の技術が伝わり、絹織物が発達	
	5世紀ごろ		中国から紅花と紫根染めが伝来	
飛鳥時代	603	推古 11	聖徳太子が冠位十二階を制定。冠には紫・青・赤・黄・白・黒の6色を配する。衣服の色も冠と同じ色が用いられたが、これは染色技術が発達したため可能になったという	
鎌倉時代	1248	宝治 2	吉野川下流(藍住町)の見性寺の開祖・翠桂(すいけい)和尚が、「唐から輸入した藍の苗を栽培して衣を染めた」と『見性寺記録』に記す。これが阿波藍の始まりともいわれる	
	12~14世紀		黒に近い濃い藍色「搦色」「褐色」(ともに「かちいろ」と読む)が「勝つ色」として縁起のいい色と見なされ、武士の服や武具はこの色で染められて「勝色」が生まれた	
室町時代	1445	文安 2	阿波国麻植(おえ)郡から大量の葉藍が兵庫北関(きたのせき)という港に運び出された記録がある(兵庫北関入船納帳)。1447年(文安4)という説も	
	1498		バスコ・ダ・ガマが喜望峰を回ってインドのカリカット(現・コジコード)に達し、東洋航路を発見。ここからインド藍がヨーロッパに持ち込まれ、「ウオード」に代わって普及していく	
	1532~56	天文・弘治年間	木綿の栽培が本格的に始まり、木綿布が織られるようになる	
	1552	天文年間	上方から藍染め職人・青屋四郎兵衛(あおやしろべえ)が阿波国・三好氏の居城・勝瑞(しょうずい)城下に移り住み、藍染めを始める。四郎兵衛は染(すくも)を使用したといわれる	
安土桃山時代	1585	天正 13	蜂須賀家政が藩主として阿波国に入る。これ以降、藍作を保護・奨励する	
江戸時代	1625	寛永 2	徳島藩が藍方役所を置く。藍の統制の始まり	
	18世紀初頭		ドイツ・ベルリンで「ペロ藍(プルシアンブルー)」が発見される	
	江戸時代中期	元禄~享保	藍麩4つを一組として土間に埋め、その中央に「火壺(火床)」を設けてもみ殻などを燃やして染液を温めることで、冬も藍染めが可能となった	
	1756	宝暦 6	玉師(藍師)株を制定し運上金を徴収する一方、藍作農家には葉を育てるだけで染に加工することすら許さなかった徳島藩に対する農民の怒りが爆発し、「藍玉一揆」が起こる	
	1781	天明元	犬伏久助(いぬぶしきゆうすけ)が染の加工技術を改良。阿波藍の質が高まる	
	1800前後	寛政年間	12~13歳だった農家の娘・井上伝が藍染めの古着の色落ちを見て「久留米紺」を考案(古着ではなく古むしろだったという説もある)	
	1818~30	文政年間	ペロ藍が大量に輸入され、藍色の微妙な濃淡で刷る浮世絵版画「藍摺絵」が登場	
明治時代	1856		イギリスの化学者、W・H・パーキンが紫色の人工染料「モーブ」を見出し、合成染料工業が起こる	
	1868	明治元	このころからインド藍の輸入が始まる(主にイギリスから輸入)	
	1870	明治 3	合成染料が初めて輸入される	
	1873	明治 6	藍の製造販売が自由化される	
	1874	明治 7	ロバート・ウィリアム・アトキンソンが来日。藍色の衣服を身に付けた日本人を見て「ジャパン・ブルー」と称する	
	1890	明治 23	バトリック・ラファティオ・ハーン(日本名・小泉八雲)が衣服のみならず、のれんなどにも濃い藍色が使われているのを見て、「この国日本は神秘的ブルーに満ちた国」と書き残す	
大正時代	1903	明治 36	徳島県の藍の生産量が2万1958トン(作付面積1万5099ha)と過去最高を記録する。しかし、同年ドイツから合成染料(合成藍)が本格的に輸入され、国内の藍作は急激に衰退していく	
	1910年代		国内でも合成藍の研究・生産が始まる	
昭和時代	1932	昭和 7	三井鉱山(株)三池染料工業所(現・三井化学[株]大牟田工場)が合成藍の工業化に成功	
	1977	昭和 52	ジーンズブームが中年層にも浸透。東京都内のジーンズショップが100軒を超える	

参考文献 (50音順)

- 『藍一風土が生んだ色』(法政大学出版局 1991)
 - 『藍II—暮らしが育てた色』(法政大学出版局 1999)
 - 『阿波藍 豪商—奥村家と吉野川—』(藍住町歴史館 藍の館)
 - 『昭和・平成家史年表(増補版)』(河出書房新社 2001)
 - 『日本の色・世界の色』(ナツメ社 2010)
 - 『日本の伝統染織事典』(東京堂出版 2013)
 - 『日本民俗大辞典(上)』(吉川弘文館 1999)
 - 『藍住町歴史館 藍の館』の展示パネル
 - 『北九州イノベーションギャラリー(産業技術継承センター)』Web サイト
- ※今号の取材で見聞きした内容も一部反映している

用語解説

- 阿波藍** 江戸時代、徳島藩領で生産した藍染めの元となる染料「染(すくも)」は、品質がよく、しかも大量に供給していたため、阿波の藍を「本藍(ほんあい)、ほかの地方の藍を「地藍(じあい)」と呼ぶほど別格の扱いをされていた。
- 藍作農家** 藍を栽培する農家のこと。
- 藍師** 藍の葉に水をかけ、さらにむしろをかけて自然発酵させて藍染めの染料「染」をつくる人。明治時代になってから、自分で染もできるようになった。
- 藍商** 染や藍の葉(葉藍)などを売買する人。徳島藩の藍商の多くは新町川の畔に藍蔵をもち、港まで小船で運び、さらに廻船によって藩外の市場に出荷した。また、その際に干鰯などを購入して廻船に積み込んで持ち帰り、藍作農家に肥料として貸し付けた。藍商は、染をつくるときに水を打つ「水師(みずし)」を養成する学校もつくった。



天然染料による「藍染め」

世界の主な藍草



インド藍

マメ科のコマツナギ属 (Indigofera) の数種を指す。インドを中心に、西はアラビア、東はマレーシア、インドネシア、さらに中南米まで熱帯・亜熱帯に広い文化圏をもつ。



ウォード

アブラナ科の越年草。高さは約90cm。ヨーロッパの繊維の青色を染めていた。国内では北海道でも染料として栽培されている。



琉球藍

キツネノマゴ科に属する低木状の草。沖縄、台湾、東南アジアの染織品を青に染める。藍葉を水に浸し、泥状に沈殿させて使う製法は、インドを起源とする。



蓼藍

タデ科の一年草。高さは60~70cmになる。日本、韓国、中国など東アジアで盛んに利用された。藍染めの染料にする場合は、花が咲く前に葉を刈り取る。

蓼藍から染料「染」ができるまで

合成藍が登場する以前、日本では蓼藍、琉球藍などの植物の葉から色素を取り出して藍色に染めてきた。ここでは、蓼藍の栽培から染料「染」に至る過程と、染を染液にする工程を見る。

- 3月 種蒔き**
かつては節分直後の2月上旬が最適とされていた。今は3月中旬の大安の日に種を蒔く
- 4月 間引き**
苗が2~3cmになったころ、間引きする
- 5月 苗取り・移植**
苗が20cm程度の大きさになると、別の畑(本畑)に移植(定植)する
- 6月 施肥**
土寄せして根元に肥料を与える。かつては干鰯やしん粕など金肥(かねごえ)も用いた
- 7月 藍葉刈り収穫**
苗が60cm程度に成長すると晴天の日を見計らって刈り取る(一番刈り)。7月下旬からは刈り株から伸びたものを刈る(二番刈り)を行なう
- 8月 藍こなし**
葉の乾燥や茎と選別する「藍こなし」を行なう
- 9~11月 寝せ込み・切り返し・ふとんかけ**
9月上旬、一番刈りの葉を寝床(土間の作業場)で発酵させる「寝せ込み」を行なう。9月中旬から12月上旬は、4~5日ごとに積み上げた葉を崩し、水をかけて混ぜ合わせては再び積み上げる「切り返し」を約20回行なう。10月中旬以降は一定の温度で発酵させるために「ふとん(むしろ)」を掛ける
- 12月 染の完成・出荷**
12月中旬以降、染料となる染が完成。むしろの袋に詰めて出荷する



乾燥させた蓼藍の葉



染づくり 「阿波藍紙人形」(河野 操さん制作/藍住町歴史館 藍の館 蔵)



苗取り

染を「染液」にして染める

- 1 染**
蓼藍の葉を発酵させてつくる土状の染料。ただし、このままでは染められないので「藍建(たて)」と呼ばれる作業が必要
- 2 藍建て**
藍の染液をつくるには、葉が含むインジゴ(色素)を溶解しなければならぬ。しかし、インジゴは水に溶けないので、アルカリ液(石灰、木灰汁など)を用いて水に溶けるようにする。発酵が進み、水面にコバルト色の泡「藍の華(はな)」が浮かぶようになる。発酵を安定させるために、ふすま(小麦粉をつくるときにでるくず粉)などの栄養分も必要
- 3 染め**
綿や絹の糸、または布を液に浸ける。数日間浸け、引き上げては空気にさらして酸化させる。これを繰り返して染めていく
- 4 水洗い・乾燥**
染め上げた糸や布は、十分に水洗いしたあと、天日で乾かす



「藍の華」



左から石灰、木灰汁、ふすま

藍師に聞く「阿波藍」の今昔

有限会社 新島藍所代表取締役 新居 修さん

苦しい時期は兼業で乗り越えた

徳島で蓼藍の栽培がこれほど盛んになったのは、吉野川のおかげです。堤防のない昔、吉野川はよく氾濫しましたが、おかげで肥沃な土が運ばれました。このあたりの家の土台が高いのは、「水は来るもの」と思っていて備えていたからです。

私は藍師として六代目にあたります。染の商売は明治6年以降です。三代目の八太(やまた)が小さな藍商を始めました。それまでは限られた家しか商いはできなかったのです。今、藍師は私を含めて徳島県内で5軒、作付面積は15haくらい。最盛期の明治36年が1万5000haでしたから1000分の1ですね。合成藍が主流になり、その流れに乗れない小規模な藍商は一気に消えました。染の需要が減りつつあるなか、それでもやめなかつたのは染を必要とする染め屋さんがいたから。私がこの仕事を継ごうと思った昭和40年代は染だけでは生活できず、牛や豚を飼い、野菜を育ててしのぎました。今残っている藍師5軒は、みんな兼業で苦しい時期を乗り越えたんです。

染づくりが一番難しいのは、その年の天候です。よい状態で蓼藍の葉を刈り取って、晴天が続いて乾燥できればいい原料ができるのですが、台風や大雨は避けられません。

昔から「染づくりをやりたい」という人を受け入れてきましたが、続けている人はほとんどいません。自分で染をつくって染めるのはいへんな努力なので「染を買った方が安い」と言います。また、化学薬品で藍建てする人もいますが、見る人が見たら木の灰で建てたのかわかる。化学薬品はわかるようです。つまり大変だけど、それだけの価値はあるということ。昔ながらのやり方って、やはり理にかなっているんですね。今、自分で染をつくり、自然の素材で藍建てして染める若い人たちが出てきました。これからが楽しみです。

(2018年12月9日取材)

世界の主な藍草
写真・資料提供・紺屋「日下田正さん、藍住町歴史館 藍の館」

資料提供・撮影協力・藍住町歴史館 藍の館
資料提供・阿波藍製造技術保存会「阿波藍たより」(平成28年3月31日発行)
資料提供・撮影協力・日下田正さん、藍住町歴史館 藍の館、BUAISOU

私たちの身のまわりにはさまざまな「色」がある。色は人間にどのような影響を及ぼすのだろうか。心理学における「色の嗜好の研究」は伝統的な分野で、「日本人の色の好み」については古くから研究されていた。しかし、日本を他の国と比較したのは早稲田大学教授の齋藤美穂さんが初。その結果、日本人の色彩嗜好は世界的に見ても大変特徴的であることがわかったという。齋藤さんに、「藍をはじめとする色と日本人の嗜好」について伺った。



図2 齋藤さんが調査・報告した「各国の嗜好色一覧表」。共通して「青」が好まれる傾向であることがわかる

色と文化と心

色彩嗜好の国際比較から

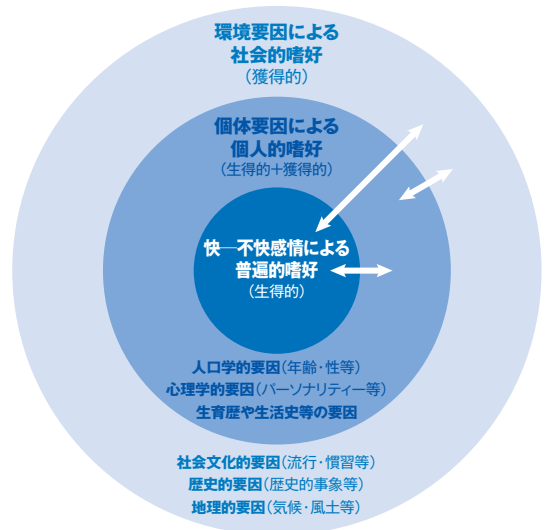


図1 齋藤さんが考える「嗜好の3層構造モデル」。外側にいくほど変動しやすい好みとなる ©1997 Miho SAITO



齋藤 美穂 さん
さいとう みほ

早稲田大学教授・博士（人間科学）

聖心女子大学文学部心理学専攻を卒業後、早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程心理学専攻を修了。1996年に早稲田大学人間科学部助教授。2001年より早稲田大学教授。平成四年度「色彩学論文賞」を受賞。色彩嗜好および色白肌嗜好の国際比較研究で知られる。

その国の文化が見える

私たちの身のまわりには、さまざまな色があふれています。今日でこそ化学染料によって多様な色をつくり出すことができますが、かつてはそれぞれの文化圏で、何を染色の原料とするかによって、生み出される色は異なっていました。

例えばクレオパトラは、旗艦の帆を紫に染め上げていたという逸話があります。これは貝紫かいむらさきという赤みよりの紫です。小さな巻貝のわずかな分泌液をたくさん集めて丁寧に糸に染み込ませ、それを太陽光に当てると化学反応を起こし、美しい紫色になるのです。糸を染め上げるには大変な労力が必要のため、この貴重な色を使うことができるのはごく限られた「時の権力者」でした。つまりクレオパトラは、自身の力の象徴として紫色を利用したのです。

西洋では、貝紫のように動物性の原料から色をつくることも多いのに対し、日本では古来、植物からとった色を重用してきました。藍色、紅色、紫色は日本の染色の三大色といわれますが、藍は蓼藍たであいから、紅は



紅花^{べんげ}から、そして紫は紫根^{しんこん}からつく
り出されています。日本は豊かな自
然に恵まれた国です。だから植物に
由来する色が多く、それが色名にも
なっているのです。

このように色の名前には、その国
の環境や文化が表れています。例え
ば中国では、紫水晶、銅緑色など、
鉱物資源からつけられた色名が多い。
あるいはイヌイットの人たちは、白
を表す言葉をたくさんもっています。
白一面の雪原のなかで生きていくた
めに、微妙な白の違いを識別し、そ
れを表現する色名が必要だからです。
また、おもしろいことにフランスで
は、シャンパン色や焦げたパンの色
(パン・ブリュレ)など、食べものと関
連した色名が他国より多いという特
徴があります。食文化を大切にする
フランスの風土が、色の名前から読
み取れるのです。

国によって異なる 色の好み

では、人はどのように色を認識す
るのでしょうか？

薄暗い光のなかで白い紙を見ても、
私たちはそれを白だと認識できます。
実際にはグレーなのですが、心理的

に白だと感じさせるメカニズムが働
いている。これを「色の恒常性」と
いいます。まわりのものと比較して
いちばん反射率が高いから白である
と、脳が高次の判断をしているので
す。

また、色を見たときにはきれいとい
か汚い、好き、嫌いといった感情を
もったり、自分の知っている具体的
なものや情景などを連想したりもし
ます。これも脳の働きです。見た色
を最終的に判断するまでには、その
人の記憶、経験、学習したことなど
すべてが関係してくるわけです。
それでは、私たちの色の好みを決
める要素はなんでしょうか。そのカ
ギを探る一つの方法として、私は色
彩嗜好の国際比較研究を行なっ
てきました。

実は、このテーマに着目するきつ
かけとなったのは、私の学生時代の
体験でした。父の仕事の関係でシド
ニー大学に留学した際、日本から持
っていった洋服の色が、ことごとく
まわりから浮いてしまったのです。
あちらの方たちは皆、鮮やかではつ
きりした色の服を着ていて、日本人
が好むような中間色はまったく見か
けませんでした。もちろん太陽の光
が違うので、色の見え方自体も違っ

ているはずですが、それにしても国
によって、こんなにも色の好みの感
覚が違うものなのかと、衝撃を受け
ました。そこから、色の嗜好を各国
で比較してみたいと考えたのです。

世界中どこでも 好まれる「青」

色や音、匂いなど、五感すべてに
関して人は好みをもっています。そ
の好みの要因は、3層構造で考える
ことができます(図1)。中心には人
間がもつ普遍的な嗜好があり、その
外側に性別、年齢、性格などによっ
て異なる個人的嗜好、さらに外側に
歴史や気候風土、流行などの環境要
因による社会的な嗜好があります。
層の内側ほどその嗜好は変動が少な
く、外側へ行くほど変動しやすくな
ります。

実際に色の嗜好を各国で比較する
と、地域や時代を超えて共通する色
の好みが存在する一方、それぞれの
文化がもつ固有の好みがあることが
わかりました(図2)。

もし世界中どこへ行っても好まれ
る色を一つ選ぶとすれば、それは間
違いなく青でしょう。色彩嗜好の調
査では、どこの国でも嗜好色の上位

に必ず青が入っています。また、国
によってタブーとされる色はさまざ
まですが、唯一、青だけはタブー色
になりにくいという研究もあります。
青から連想されるのは、水の色、
海や空の色です。そういった生命の



オープンカフェでつるぐ人々(アメリカ・カリフォルニア州サンディエゴ)

営みにとって大切で不可欠なものを、人間は人種や文化、環境要因を超えて普遍的に快く感じるのではないのでしょうか。

一方の嫌悪色については、多くの国が共通してくすんだ茶色を挙げています。ところが、そのなかでデンマークなどは特異です。図2を見てください。茶色ではなく、ペールトーンの淡い色が嫌悪色の上位を占めています。これらの色は日本人、特に女性からは比較的好まれる色ですが、デンマークの人にとっては不健康、病的といったイメージがあるようです。

日本人にとって特別な色は「白」

日本人の色の好みで私が着目しているのが、白の嗜好です。私の初期の研究で、欧米、アフリカ、オセアニア地域6カ国と日本を対象にアンケート調査を行いました。その結果、他の国では白は10位内にも入らないのに、日本では高い選択率で白が嗜好色の1位だったのです。これは白だけに見られる特徴でした。その後、アジアを含めてより広範囲に行なった調査では、日本をはじめア

ジアの国々だけ、嗜好色の上位に白が入っていました。

なぜ日本人は白が好きなのか。日本には、昔からある種の太陽信仰がありました。神話のなかでは、太陽の神である天照大御神が日本をつくつたとされていますが、その天の光を表す色こそ白で、それが白を神聖視する土壌になったと思われる。

神社の素木造りは、素木と書いて「しらき」と読みます。神道の神官の装束も、祭祀に使う御幣ごひも白です。白は、嘘いつわりなくありのままに神様に向き合うための、神聖な色となっていたのです。今では信仰的な意味合いは少なくなりましたが、日本人が白を好む背景には、そうした歴史が影響していると思います。

「藍」と「白」こそ日本らしい組み合わせ

藍色も、日本の文化に根づいた親しみ深い色です。藍色の場合、士農工商といった身分を問わずよく使われていたという特徴があります。当時、天然の藍には虫よけ効果があるといわれていたことも、自然のなかで生きていくために誰もが藍色を身につけた理由の一つでしょう。

藍、紅、紫の三大色のなかでも、特に藍色は色名が細分化されています。それは、藍色を日常着や正装、あるいは武具に使うなど、いろいろな場面できまぎまに利用していたからであり、細かい色の区別をする必要があつて色名が増えていったのです。

こうした同系色の微妙な違いを上手に使いこなすのは、日本人独特の感性です。それがよくわかるエピソードがあります。

江戸時代後期、豊かになった町人は色とりどりの着物を楽しんでいましたが、幕府が町人に奢侈禁止令を出し、茶色、鼠色ねずみ、藍色以外の色を身につけることを禁じました。すると町人たちは、もともと多様だった藍色に加え、茶色、鼠色に非常に多くのバリエーションをつくり出したのです。これを四十八茶百鼠しじゅうはちゅうひゃくねずみといいます。一見華やかではない茶色や鼠色、その微妙な色味のなかに、江戸の人々は粋を見出し、新たなファッションを生み出していったのです。オランダのデルフト陶器など、日本の藍染め陶器から影響を受けたものがヨーロッパにはいくつもありません。日本文化が西洋に渡っていったとき、日本らしさを象徴するもの

一つに藍があつたことは間違いありません。しかし残念ながら今日、ジャパン・ブルーとしての藍色は、世界的にみると認知度は低いように感じます。

心理学の用語に「単純接触効果」というものがあります。人は何度も目にするもの、接触の頻度が多いものに対して、好みを感じるようになるのです。藍に置き換えて言うならば、藍色をどんどん使い、日本人にも他の国の人にもどんどん接触してもらおう頻度を高くすること。これが藍という色を文化として保存していくことにもなるし、心理的にも好みに密着した形で藍色が存続するのではないのでしょうか。

私は、藍色を引き立てる色は、絶対对白だと思っております。普通は藍色の反対色となる黄色のほうですが、藍色の場合、白と合わせの方が、互いの色が際立って見えます。日本人がとても好きな白は、日本に昔から根づいているジャパン・ブルーをいちばん引き立てる色なのです。そう考えると、白と藍、この二つの色の組み合わせこそ、日本文化を表すのに最適な色なのではないかと思えます。

(2016年11月25日取材)



Interview



藍染め新世代

「BUAISOU」

の挑戦



現場 1

徳島県の吉野川流域は、江戸時代から明治時代中期にかけて藍染めの染料となる「^{すくも}薬」を供給したことで知られる。徳島の薬は品質の高さ、そして圧倒的な量から「阿波藍」と称され、全国へ供給された。今も薬をつくりつづける藍師が数人いる。その一人、^{にい}新居修さんに薬づくりを学び、自らの手で藍染めを行なう若者たちがいる。伝統のうえに新しい発想を盛り込みながら、藍染めを世界に送り込もうとする四人組「BUAISOU（ぶあいそう）」の実像を追った。

一人だったら 挫折していたかも

熊手で切り崩すたびに、もうもうと湯気があがる。むあつとした、息が詰まるような匂いが立ち込めるなか、若者たちは薬をつくるための「切り返し」と呼ばれる作業を黙々と行なっていた――。

ここ徳島県板野郡の上板町は、「四国三郎」との異名をもつ暴れ川・吉野川の左岸にある。氾濫によって運ばれた肥えた土が客土（注1）の役割を果たし、蓼藍の成長を促し、連作障害も封じた。徳島藩（注2）を治めた蜂須賀氏は蓼藍の栽培と薬づくりを奨励。藍農家から集めた薬は、藍商と呼ばれる商人たちによって和船で各地に運ばれた。

こうした歴史を有する地で、2015年（平成27）4月に起業したのが「BUAISOU」だ。この名は、公の場でジーンズを初めてはいた日本人と伝わる白洲次郎の邸宅「武相荘」にちなんだもの。彼らは自分たちで蓼藍を栽培し、刈り取った葉から薬をつくり、その薬を発酵させて染液（以下、液）にする「藍建て」を行なう。そうして染めた衣服やバッグ、小物などを販売している。



牛舎の一部を改造して土間にした作業場で「切り返し」を行なうBUAISOUのメンバー。
発酵させるために、週に一度切り返す。右端の女性はシンガポールからの研修生

BUAISOUは、東京の商社で働いていた山形県出身の渡邊健太さんと、東京の美術大学で草木染めやテキスタイルを学んでいた青森県出身の椿覚郎さんが上板町の「地域おこし協力隊」に応募したことに端を発する。2012年（平成24）7月、渡邊さんと椿さんは上板町に移り住み、町営の「技の館」（注3）の管理運営、そして同館で用いる薬と染料をつくり来館者を指導する役目を担う。薬づくりは藍師・新居修さんに学んだが、「怖かったです」と渡邊さんは振り返る。7月は猛暑のなかで蓼藍の刈り取りを行なう時期。何をすればいいのかわからないうえ、慣れていないので動作も鈍い。「早よせい！」と新居さんに怒られることもしばしばだった。しかも「技の館」で使う薬をつくるために、翌年の3月には自分たちで畑を借りて種を蒔かなければいけない。7月に着任したので研修期間は半年強。短い時間なのに覚えることは膨大だった。「畑に出てすぐに『これは二人でやっついていくしかない』と思いました」と椿さんは言う。上板町で初めて出会った二人だがほんの数日で同盟を結び、作業を分担して習い覚えていく日々を過ごす。「二人いてよかった

（注1）客土

土質を改良するため、よそ（=客）から土を運び入れること。

（注2）徳島藩

阿波国（徳島県）と淡路国（兵庫県淡路島）の二国を領有した藩。阿波藩ともいう。1585年（天正13）に蜂須賀家政が阿波一国17万6000石で徳島地方に封じられたのに始まる。大坂夏の陣の功により淡路国8万1000石を加増され、25万7000石となったが、阿波藍と塩、阿波和三盆糖の利潤で実質的には50万石あったといわれる。

（注3）技の館

上板町に古くから伝わる伝統的な工芸品の見学や藍染め体験ができる施設。歴史や文化を肌で感じることで、日常生活で失われつつある人間性の回復を目指す。



全国有数の暴れ川「吉野川」。氾濫のたびに上流から運ばれた肥沃な土が「阿波藍」を育んだ



BUAISOUを見守る藍師の新居修さん。「成功してほしいね」と期待を寄せる

給料をもらいながら 藍染めが学べるなんて

です。もし一人だったら途中でやめていたかも」と楳さんは笑った。

東京での暮らしを捨ててまで、なぜ二人は徳島にやってきたのか。

商社マンだった渡邊さんは、藍染め体験がきっかけだった。「素手で染めたときの感触や、色が変わっていく様子を見て感動したのです。それで学んでみたくなりました」。

「会社勤めは嫌いじゃなかった」けれど、藍染めをやりたい思いは膨らむ。そこで上板町の募集を知り「お給料をもらいながら藍染めの修業ができるなんて！」と応募したのだ。

一方の楳さんは「美大を卒業したら藍染めを現場で学ぶ」と決めていた。「いろいろな染料があるなかで、種から育てて染料にするまで一年かかる天然藍は特殊です。液にする過程で発酵させるのですが、『どのタイミングで何を入れる』のかは本を読んでもわからないんです」。

卒業後、無給の研修生として都内の工房に通っていたが、工房長が新居さんのお弟子さんだったので公募を知る。

「あとは渡邊さんと同じです。藍染めが学べるなら行ってみよう」と

地域おこし協力隊は単年度契約で、しかも最長3年間。しかし、不安はまったくなかったという。「ダメならまた考えれば良いと思った」と二人は口をそろえた。

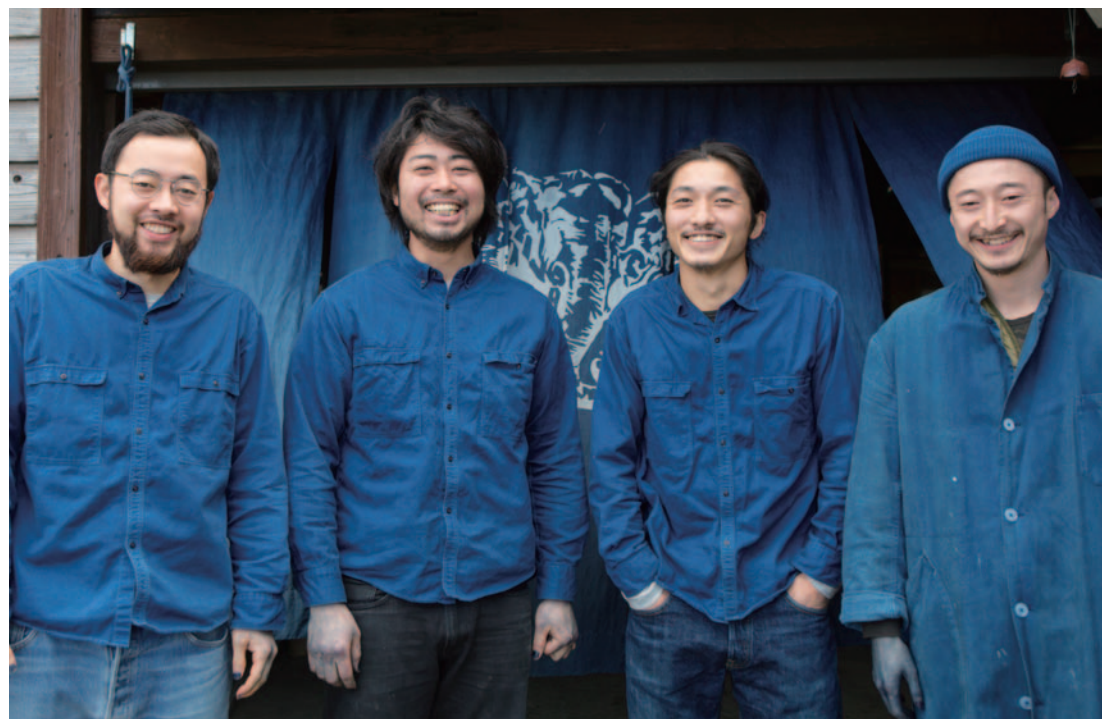
二人から四人へ 始動するBUAISOU

2013年(平成25)、二人は前年に学べなかった春から初夏の作業を新居さんに教わっていた。そして7月に新たな仲間が加わる。渡邊さんの大学時代の後輩、結城研さんだ。

渡邊さんが大学の恩師に上板町へ行くことを報告したとき、結城さんとばったり会った。「一度遊びに来いよ」と誘うと結城さんはすぐやってきて1週間ほど作業を手伝った。卒業後は銀行に勤めたものの3カ月で退職。新居さんは渡邊さんに「結城が辞めるのを止める」とまで言った

が、結城さんは上板町に来て、BUAISOUが法人化するまで新居さんのもとで藍師として修行を積む。

また、隣の石井町でファッションデザイナーをしていた三浦佑也さんと出会ったのもこの年だった。「藍染



自らの手で染めた藍色の衣服を身にまとうBUAISOUのメンバー。左から三浦佑也さん、渡邊健太さん、楳覚郎さん、結城研さん。自分たちで牛舎を改造してつくった作業場兼オフィスの前で

めをしている人が「同年代で衣服をつくっている男性がいる」と紹介してくれたんです」と楳さん。意気投合し、三浦さんもメンバーとなった。

テレビ電話を通じて NYで藍建て

法人化するまでの間、BUAISOUは藍染めと製品づくりにも挑んだ。渡邊さんと楳さんは上板町役場に副業の許可をもらい、業務時間外と休日で活動。徳島と東京で初の展示会が決まり、「次は海外の反応が見たいね」と話していると、BUAISOUを陰で支えるマネジメントの西本京子さんがニューヨークの藍染め体験イベントの話をもってきた。「『やってみたいっす！』と即決でした」（渡邊さん）。

渡邊さんが代表して行くことになったが、滞在できるのは最長1週間。薬が液になるまで10日ほどかかるので、現地に着いてからでは間に合わない。そこで先にニューヨークへ発ったイベント企画者に薬を送り、テレビ電話で指示して液をつくることにした。

楳さんは「ニューヨークの、しかも水道水で発酵するわけがないと思

ってました」と笑う。渡邊さんも「液がつくれなければ旅行気分ではないかと開き直りました」と言う。

ずぶの素人に「藍建て」を頼むとは、なんて無鉄砲なのだろう。しかし若さゆえの思いきりのよさは吉と出る。70Lの「めちゃくちゃ元気な液」（楳さん）に仕上がった。

意気揚々と乗り込んだが、予定していた体験2件のうち1件はキャンセルに。日本人学校の藍染めだけになったので肩透かしを食らう。液を捨てて帰るのも忍びない。そこで、ニューヨークに住む西本さんの知人に頼みこみ、その人のアパートで

「藍染めパーティー」を開く。3日間で約90人が来て、ビールを飲みながら藍染めを体験した。

目の前で藍色に染まる様を見たアメリカ人は「オオー！」「ワァー！」など劇的な反応を示したという。

「畑に種を蒔いて薬をつくり、さらに発酵させて液にしてからようやく染められるというプロセスも伝えたので、『アート』と受け止めてくれました」と手ごたえを感じた渡邊さんと楳さん。参加者は液が染み込んだ「青い手」のまま帰っていった。

これを機にたびたびニューヨークを訪れ、ショップを回っては「藍染めワークショップを開くので」と招待状を手渡した。「アーティストやパレル関係者が多かったです。お金をかけずにアンダーグラウンドな感じでやっていました」と二人は笑う。海外におけるこうした活動が話題になり、それを見た日本のパレル関係者から声がかかるようにもなった。

アパートを開放してくれた日本人は、2015年4月に設立したニューヨークスタジオ「BUAISOU Brooklyn」のマネージャーになり、ロシアやオランダなどさまざまな国の人たちともつながった。



① 蓼藍の種を見せてくれた渡邊さんの手。この種から藍染めが始まる ② 藍色に染めたブーツ。これは個人ユーザーから送られてきたもの ③ ずらりと並んだシャツは国内外の有名ブランドとBUAISOUのコラボレーション製品 ④ 「タルマ糸」とのコラボレーションで生み出した藍染めの糸 ⑤ 淡くきれいな色で染めあげた自社製のトートバッグ ⑥ 作業中の三浦さん。畑仕事、薬づくり、染め、そしてオリジナル製品まで一貫したもののづくりを行なう ⑦ 液の状態を確かめるため、染めた布を貼り付けたノート。毎日欠かさず記録する ⑧ BUAISOU 独自のステンレス製の幅広な槽に布を浸ける。槽には保温用として電熱線を巻いて温度調節している

「畑から色をつくる」というインパクト

順風満帆のように見えるかもしれないが、BUAISOUの事業はまだ緒に就いたばかり。取材時、渡邊さんは助成金の書類申請に追われ「藍染めだけがしたいです」と嘆いていた。

究極の目標は「自分たちがつくりたいものをつくって売ること」。そこに向かって、今は既製品を藍色に染める「染色委託」が軸となる。企業だけでなく、個人ユーザーからも注文がある。BUAISOUは自分たちが染めた作品を画像投稿サイトにアップしているの、それを見た人から「染めてほしい」とシャツ、カバン、ブーツなどが送られてくる。こうした委託を受けつつ、自社製品の比率を徐々に高めていく。

ものづくりに関しては衣服がメインとは考えていない。「トートバックなども同じくらい重要ですし、この前は『手縫い糸』も商品化しました」と楮さんは言う。デザイナーの三浦さんも「今はいろいろと形にしている段階。そのうち『よし、これなら!』というものが出てくるはず」と語る。



4 そんな彼らを見守る新居さんは、

「彼らは若いから発想が新しいし、しがらみもないから自由だ。後に続く若い人たちのためにも、彼らには成功してほしいね」と期待を寄せる。発想という点では、染めを行なう

独自のしくみが挙げられる。伝統的な紺屋こいやなら、藍建てと染めは土中に埋めた藍甕あいがめで、温度管理は粉殻で起こす火で行なうが、BUAISOUはステンレス製の幅広な槽を用い、しかも保温用に電熱線を巻く。幅広な槽は藍甕よりも幅のある生地が染められるし、電熱線なら温度調節もしやすい。

とはいえ、手間暇かかる天然藍のものづくりは「価格では勝負できない」(三浦さん)のも事実だ。「どうやったら買っていただけのかを悩んでいます」と三浦さんは率直に語る。カギになるのは、藍のどこに惹かれるのかと問うたときの、結城さん



5

の言葉かもしれない。「BUAISOUはみんな藍が好きです。僕はそのなかでも『畑で葉を育てて、色をつくる』というプロセスが一番惹かれます」。

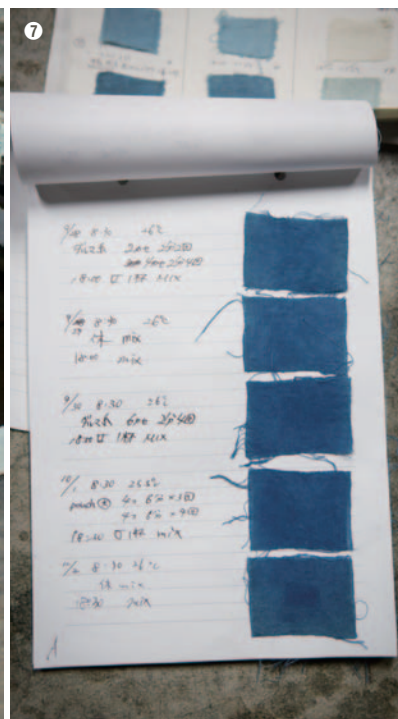
アメリカ人が驚いたように、欧米で天然藍は絶えて久しい。日本人でさえどれほどの人が正確に知っているだろうか。天然藍のプロセスには、たしかにインパクトがある。

テレビ電話で藍建てを指示し、ニューヨークでゲリラ的に藍染め体験を繰り返し、電熱線を巻いたステンレス槽で染め、SNS経由で海外から注文を受ける——伝統工芸に新しいやり方を持ち込んだBUAISOU。「やるが多すぎて、自分たちが身につけるものさえないかなか染められない」(渡邊さん)という日々のなか、〈藍染め新世代〉の挑戦は続く。

(2016年12月8~9日取材)



8



7



6



時を刻む

木曾漆と有田焼の「藍」



藍色が活かされているのは、何も衣服に限ったことではない。長野県の時計企画室コスタンテの純国産ブランド「SPQR（スポール）」の主要シリーズには、欧米で「japan」と称されるほど評価の高い漆塗りの技術を活かした「手描き濃紺漆加工」や、藍色を染め付けた有田焼などを用いた文字盤・竜頭がある。漆器といえば朱や黒を連想するが、藍の色粉を用いる漆塗りもある。匠の手業を見るために信州を訪れた。

ジャパン・ブルーをあしらった腕時計

文字盤や竜頭に、漆塗りや有田焼の「ジャパン・ブルー」すなわち藍色をあしらった限定生産の高級腕時計がある。年月を経て使い込むほどに愛着が湧くシンプルなデザイン、日本の伝統工芸とのコラボレーションを旨とする国産ブランド「SPQR（スポール）」ウォッチのアイテムの一つだ。

長野五輪のメダルも手がけた木曾平沢の漆塗り職人・蒔絵師、荻上文



現場 2



峰みねさんの手業による漆塗りの文字盤と竜頭が特徴の「SPQR urushi kiso」。2015年（平成27）未発売の新商品には、漆といえば連想する朱色のほかに藍色、黒紅梅、深緑の4色があり、とりわけ人気が高いのは藍色だという。

SPQRブランドを生んだ時計企画室コスタンテ代表取締役の清水新六さんは「青というより初めは黒っぽいのですが、2年ほど経つと本来狙ったジャパン・ブルーの藍色に落ち着いてくるのです」と、漆塗りならではの経年変化の魅力を語る。

また、天保年間創業の有田焼の名門窯元「しん窯」とコラボレーションしたのが「SPQR arita 400」。日本初の磁器が有田でつくられてから2016年で400年となることを記念したモデルだ。文字盤、竜頭、裏蓋が白磁。ひときわ目を引くのが、裏蓋に描かれた豊穰を意味する稲穂の藍色。作陶家、橋口博之さんの手描きによる極細の平行線に職人技が光る。

「有田焼はもともと藍色の世界。いくつか窯元を紹介されたなかで、藍色の染付を専門に手がけるしん窯さんに決めました」と清水さんはこころでもジャパン・ブルーにこだわった。

時計企画室コスタンテの純国産ブランド「SPQR（スポール）」。

右が文字盤を藍色の漆塗りで仕上げた「SPQR urushi kiso」。竜頭にも文字盤と同じジャパン・ブルーを埋め込んでいる。左は有田焼の名門窯元「しん窯」とコラボレーションした「SPQR arita 400」。藍色のアラビア数字が印象的

身につけたい時計を自分でつくる

SPQRは日本の精密機械工業が発展した信州・諏訪の地を拠点に企画・製造されている。清水さんは諏訪精工舎（現・セイコーエプソン）に入社して商品企画から製造工程、アフターサービスまで全般的な技能を身につけ、ミラノや香港に駐在し、日本製の腕時計を世界に広める事業に尽力した。いつしか大企業の制約を離れ「自分で身につけたい時計をつくりたい」との思いが強くなり、15年前に独立して立ち上げたのがSPQRブランドである。

「卓越した精緻さと品質を約束する」(Superiore Precisione Qualita Reservato)という商品コンセプトを表すイタリア語の頭文字がブランド名。流行を問わず、時代を超越した飽きのこない定番商品を30〜150個程度の小ロットで生産している。木曾漆や有田焼以外にも、箱根の寄木細工や柿渋染めなどをデザインに取り入れ、日本の伝統工芸の知恵と融合した商品を海外にも紹介。日本で唯一の馬具メーカー、北海道のソメスサドル株式会社（以下、ソメス。注1）と提携し、馬具用の頑丈で腕にもよくなじ

むブライドルレザーを時計バンドに使うなど、新しい素材も採用している。「誰もやっていないことをしないと意味がない」。これが清水さんのポリシーだ。

諏訪湖に近い岡谷市の自宅兼オフィスを拠点に、デザインから素材、部品、組み立てに至る製造工程で約40社、販路では約30社と協力関係を結んでいる。海外も含め会社員時代からの仲間が多い。

世界のフォーマルな場にもふさわしい風格と気品

木曾漆と有田焼を使ったジャパ

ン・ブルーの腕時計は、2009年（平成21）からスタートした藤原和博さんプロデュースの「Japanシリーズ」の一つ。都内では義務教育初の民間企業出身の校長として教育改革を成し遂げた藤原さんが、中学校での任期を終えた「自分へのご褒美」としてSPQRを購入したことからコラボレーションが始まった。

ソメスの鞆を愛用していた藤原さんは、SPQRの時計バンドがソメス製だったことに目を引かれ、「デザイン基調がベーシックで品がよく、ホンモノ志向が見て取れる」（藤原和博著『つなげる力』文藝春秋2008）と気に入って、つくり手の清水さんに会

った。たちまち二人は意気投合する。藤原さんは自分の求める腕時計になかなか出合えないことから、オリジナル時計をプロデュースできないかと提案。これに清水さんがこたえた。世界中のフォーマルな場でも恥ずかしくない風格と気品を備え、日本の職人の技が結集され、ネオジャパネスク（新しい日本風）なデザイン。そんなコンセプトのシリーズだから、色合いとすれば当然ながらジャパン・ブルー（藍色）が浮かび上がった。藍色の漆文字盤を使った第一弾から、有田焼文字盤を際立たせた薄型の37mmモデルに小秒針文字盤を搭載した

「arिता ism smaller



- 1 大手企業の会員制コンテンツに提供した腕時計の裏ぶた。200年前の有田焼の破片を埋め込んでいる
- 2 SPQRブランドの生みの親、時計企画室コスタンテ代表取締役の清水新六さん。「自分で身につけたい時計を」と独立した
- 3 天保年間創業の窯元「しん窯」が手がけた有田焼の器



（注1）ソメスサドル株式会社

北海道歌志内市に本社を置く馬具製造・販売企業。鞆やポーチ、ポシエット、財布、ベルトなども手がける。

second」の第九弾までがリリースされている。

藍の色粉を使った 繊細な手業

長野県塩尻市の木曾平沢は明治初期から漆器の生産地として栄えた。

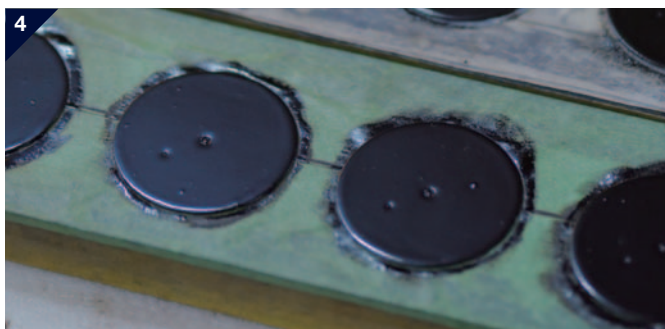
中山道沿いの南北に長いまちなみには、漆器づくりの作業場である塗蔵が90棟以上現存し、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。

40年以上、漆器づくりに携わっている荻上さんを清水さんとともに訪ねた。この日はちょうど、山加荻村漆器店の工房でSPQRの文字盤に

藍色の漆を塗っていた。漆塗りといえばふつう朱か黒だが、他の色粉を使えばそれ以外の色も出せるのだ。

とはいえ荻上さんによれば「漆に混ぜるときれいに直らない（均一になりにくい）のが色粉のクセ」なのだという。「藍色や緑色などの色系統の粉は、朱色の粉と違って塗ったあとと刷毛目が目立ちやすく、結構難しいんです」。

塗っては研ぎを繰り返して、何層にも刷り重ね、艶を出していく。1回塗ると2日ほど乾かす。漆は空気中の水分と化学反応して硬化するので、



4 5 藍色の漆をSPQRの文字盤に塗る。乾かして人造石で研いだあと、また塗り重ねる。最初は黒っぽいのが、時間が経つと藍色に変わる



6 漆塗り職人・蒔絵師の荻上文峰さん。作業しながら気さくに話してくれた

7 荻上さんが手がけた長野五輪のメダル。金属に漆を塗る技術を用いた



梅雨時は急激に乾いて縮み、皺が寄りやすくなる。逆に冬は湿度が足り

ず乾きにくいいため、常に75%程度の湿度に保つ必要がある。漆塗りは全10工程ほどに及ぶという。小さな文字盤とはいえ、手間と時間のかかる手業だ。

「塗りたては少し黒っぽいでしょ？

これは茶褐色で半透明の漆が、その時点では色粉に勝っているから。しかし2年ほど経つと透けてくるので、もとの藍色が浮き出るので」と荻上さん。経年変化でジャパン・ブル1が鮮明になるしくみをこう説明し

てくれた。

荻上さんはかつて時計の文字盤工場とともに金属に漆を塗る技術を確認し、長野五輪のメダルにもそれを活用した人物だ。会社員時代から荻上さんを知っていた清水さんは「漆塗りなら荻上さんに」と即決した。

2016年にある大手企業の会員制コンテンツにプレゼント用として提供した腕時計は、200年前の有田焼の破片を裏蓋に埋め込み、荻上さんによるプラチナの粉の蒔絵をベゼル（注2）にあしらった超豪華な一品物だ。今後は、文字盤に旧中山

道の宿場の風景を荻上さんが描いたシリーズも予定されている。

「藍染めは土着の色、日本古来の色。愛着を感じますね」と荻上さん。清水さんも「藍はほかの色より気持ちは落ち着きます」と話す。しかし、ことさら藍色を狙った商品開発に特化してきたわけではない。「ネオジャ

パネスク」の価値を腕時計に盛り込もうとしたら、おのずと藍色が前面に押し出された。その事実こそ、連綿と受け継がれてきたジャパン・ブルーの真価を、雄弁に物語っている。（2016年11月30日取材）

（注2）ベゼル

時計の表示部分や内部を保護するために設置されたガラスやプラスチックなどの周囲に取り付けられる円状のパーツ。



現場2



現場3

日本の「青」で

世界に通用するジーンズを

今から150年ほど前、アメリカの鋳夫たちの作業着として誕生した「ジーンズ」。日本でも衣服としてすっかり定着しているが、「日本の青（藍）」にこだわったジーンズの製造・販売に取り組む会社が岡山県倉敷市にある。有名なおとぎ話「桃太郎」の名を冠する「桃太郎ジーンズ」、本藍手染め・手織りの最高級ジーンズ「金丹」などを手がける株式会社ジャパンブルーだ。日本はジーンズでは後発国だが、「100年程度の遅れなら追い越せる」と、天然藍の色と風合いを活かしたジーンズを世界に発信する同社を訪ねた。

児島ジーンズで 世界一を目指す

いまや日常着となったジーンズ。1870年代にアメリカで生まれたジーンズを日本で初めて国産化したのが、岡山県倉敷市にある児島地区（注1）だ。「児島ジーンズ」といえば、製品の質のよさからジーンズファンの間では以前から有名だった。近年はテレビや雑誌に取り上げられ、海外にまで知られている。

レトロな雰囲気を残す味野商店街。その一面に延びる「児島ジーンズストリート」では、まちなかに吊るされたジーンズが気持ちよさそうに風に揺れている。

この児島を「ジーンズの聖地」として一躍有名にしたアパレル・テキスタイルメーカーがある。2009年（平成21）に「児島ジーンズストリート構想」を打ち出し、地域おこしに貢献する眞鍋寿男さんが代表を務める株式会社ジャパンブルーだ。最高級品として本藍手染め・手織りの

「金丹」を展開する。

また、同社の代名詞となっている「桃太郎ジーンズ」は著名人などからの評価も高く、国内外に多くの愛好者をもつ。主に合成藍による「銅丹」や「出陣」などが定番だ。「銅丹」と「出陣」は回転速度の遅い旧式の織機で織ることで生地表面に凹凸ができ、それが擦れることで独特の色落ちが楽しめる。

今日ではほとんどのジーンズメーカーが化学的につくられた合成藍を用いるなか、ジャパンブルーは天然

藍のような色と風合いにこだわる。

「日本の青『藍』で世界一になる」というスローガンを掲げ、眞鍋さんがジャパンブルーの前身となる株式会社コレクトを立ち上げたのが1992年（平成4）。テキスタイル業界に入りデザイナーを志し、藍染めに出会ったことがきっかけだった。

思い描いたのは 昔ながらの日本の青

テキスタイル業界に入って間もな

本藍手染めの糸を手織りした美しいテクスチャー。この生地が最高級品「金丹」となる。ちなみに納品は1年待ち



桃太郎ジーンズのキャラクター「桃太郎くん」



株式会社ジャパンブルーが展開するジーンズ類。本藍手染め・手織りによる最高級品「金丹」(手前)、回転速度の遅い織機を用いることで独特の色落ちが楽しめる「銅丹」(中)、桃太郎ジーンズのトレードマーク「白い二本線」をあしらった「出陣」

いころ、大手ジーンズメーカーの企画販売の仕事で藍染めの魅力に惹かれた眞鍋さんは、染料の薬をつくる藍師・新居修氏に師事し徳島へ通う日々が始まる。「微妙な色合いを表現する青色の奥深さにはまると抜け出せなかった」と眞鍋さんは藍染めに惹かれた理由を振り返る。

「料理に隠し味があるように、おそらくタンニンやポリフェノール、自然の植物中にある〈余分なもの〉が重要な役割を果たしている。合成藍では表現できない色です」

失敗の連続のなか、見よう見まねで藍建てと染めの技術をなんとか習得すると、眞鍋さんはコレクトを立ち上げたのち、本藍染め専門の工房「藍のぞき」を児島に開設する。以来、染め職人としても活動してきた。

「日本人は甕覗き、水浅葱、鉄紺、など色に名前をつけることで風情を表してきました。日本ほど色にこだわる国もない。出身地の児島はジーンズの産地ですし、ジーンズといえは青。昔から器用にもものづくりを行なってきた日本人が本気でジーンズをつくれば、世界マーケットの頂点に立てるかもしれないと思ったんです。ジーンズの普及こそアメリカより100年遅れています。1世紀

(注1) 児島地区

江戸時代に綿花栽培が盛んだったことで古くから繊維のまちとして知られ、茶道具などに使われる真田紐の生産に始まり、軍服、学生服、作業服の一大生産地に。1964年の東京オリンピックを境にジーンズ生産の基盤が整うと、今日まで続くジーンズ産業の集積地が形成された。



味野商店街「児島ジーンズストリート」で空中に吊るされて風に揺れるジーンズ。
後ろポケットに「白い二本線」が見えるのは「桃太郎ジーンズ」だろう



株式会社ジャパンブルー代表取締役社長の眞鍋寿男さん。藍染めに魅了されたことが今につながる

ンを採用した。

一般的なデニム生地の倍以上の価格だが、1990年代のヴィンテージブーム（注2）とも相まって、独特の色味と質の高さは、海外のナショナルブランドや一流デザイナーにも認められた。

ストーリーのあるものづくりを探究

ジーンズにかける想いを届けるため、眞鍋さんは見本のジーンズを何十本もバッグに入れて海外の店舗を1店ずつ回った。海外での取り扱いは、約50店舗にのぼる。

「海外のユーザーは正直です。誰がどんな思いで製品をつくったかを、自分の言葉できちんと伝えることができなければ相手にしてもらえない。それが結果的に日本の安全・安心やこだわりにつながる。たんに日本製

だから、藍染めだからいいというのはもう通用しません」

そのため社員たちに一貫して伝えているのは、「ストーリーのないものづくりはやめよう」ということだ。

ジーンズストリートに店を構える児島味野本店には、世界に一台の手織り機がある。これで作られるのが「金丹」だ。糸の張りに気をくばり一定の力加減で織りつづける必要があるため、1日に80cmほど織るのがやっと。価格は1本20万円以上するがジーンズ愛好者からの人気は高く、注文が殺到して納品は1年待ちだという。新入社員の仕事は、まず掃除をすることから始まる。

「初めは何もできなくても、掃除するだけでもものづくりの空気は伝わるはず。製品づくりにかける想いやこだわりを理解しなければ、製品のよさを人に伝えることもできない」と眞鍋さん。

藍染工房を開設した際には、「どうせ社長の趣味でしょ」と揶揄する人もいたという。「つくり手と同じ立場環境に身を置かなければ同じ視点をもつこともできません。今は自分で染めることは少なくなりましたが、以前は海外に行くと「青い爪をした日本人」とよく言われたものです」。

程度の遅れなら日本人は取り戻せる
と思いました」

そこで眞鍋さんは、日本人が世界で最初にジーンズをつくっていたらどんな青色を探究しただろう、と考えた。

「僕がイメージしたのは、祖父や祖母が使っていたふとんや座布団の色。日に焼けて少し色あせたような、緑

がかった深みのある青。これを『日本の青』としてデニム生地で打ち出せないかと考えました」

試行錯誤のすえ、既製品として完成させたのが「ジャパンブルーデニム」だ。緑がかった独特の色味は、天然藍のような風合いを醸し出している。素材には、綿花でも最高品質とされる手摘みのジンバブエコット

「青」の文化は減びない

眞鍋さんは現在、藍の染料、生産工程において、もっと合理的な方法がないかと模索している。

2007年（平成19）から2008年（平成20）にかけて、国からの委託事業で研究機関を巻き込み、蓼藍^{なまめ}以外に青の色素を活用できる品種がないかと、世界中の植物を採取して調べた。藍染めをするうえで天然の染料と合成の染料の両方を知ることが大切だと眞鍋さんは考える。

「ジーンズのほとんどが合成染料です。ファッションとして定着していることは否定しませんが、もっと天然の染料が広がるのが理想です」

ジャパンブルーではかつて染料をつくるために、畑で蓼藍の栽培も行っていた。春に植えて夏に刈り取るため、猛暑のなかでの手作業による水やりや刈り取りは過酷を極める。高齢化が進み蓼藍を栽培する農家は減っており、需要もなかなか見込めないため、合理化を図ろうにも投資できないのが現実だ。「合理化できな

いから藍染めの製品単価は高い。伝統工芸の冠だけが独り歩きしても人が使わなければ意味がありません。変えていかなければならない部分はたくさん見えている」と、眞鍋さんは藍染めの将来を危惧する。

その一方でまた、「ただ一つ言えることは、青（藍）の文化・産業はいつの時代も減びることはない」とも言う。

「人間が青色の染料を見いだしたのは、多様化した生活のなかで必要だったからこそ。今はジーンズという

形で世界中の人がはいています。日本人の感性でしか発見できないものを、一つの商材であるジーンズを通して世界に発信するのが私たちの使命です」と眞鍋さんは熱く語った。

ジーンズにおいて日本はたしかに後発国だ。歴史を遡ることはできない。しかし、これから新しく歴史をつくることはできる。日本古来の藍染め文化に裏打ちされた児島発のジーンズが、世界のスタンダードとなる日を楽しみにしたい。

（2016年11月22日取材）



1



2



3



現場3

1 仕立てはそのまま、生地をデニムに置き換えた「DENIM KIMONO」。ブランド名「RAMPUYA」とは「藍布屋」からのネーミング 2 児島味野本店ではかつて販売したジーンズを展示。経年変化がよくわかる 3 ここにしかない手織り機で「金丹」の生地を織る入社3年目の池田一貴さん



現場 4



リンダ・ブラシントン さん 染色家 研究者

イギリス在住。学生時代、藍に興味をもち、それ以来アーティストとして活動する。その一方、研究者としてUCA 芸術大学・ファーナムに勤め、藍染めの防染や捺染を実践。日本滞在中は栃木県芳賀郡益子町の紺屋「日下田藍染工房」で作品を制作し、参加型ワークショップや講演会、作業公開などの交流イベントを行なった。

「日下田藍染工房」の染め場で微笑むリンダ・ブラシントンさん。作品づくりを通して得た、イギリスの合成藍と日本の天然染料による藍染めの違いを語った

淡い色から濃い色まで 自在に染められる 「日本の藍」

2016年11月、栃木県の^{ましこ}益子町にイギリスの染色家、リンダ・ブラシントンさんが4週間ほど滞在した。これは益子町のアーティスト・イン・レジデンス事業(注1)によるもので、ブラシントンさんは寛政年間(1789-1801)創業の紺屋「^{ひげた}日下田藍染工房」で作品づくりを行なった。日本の藍は海外からどう見られているのか。また、イギリスにおける藍染めの現状、そして徳島産の^{すくも}染からつくった天然染料で染めてわかったことなどをお聞きした。

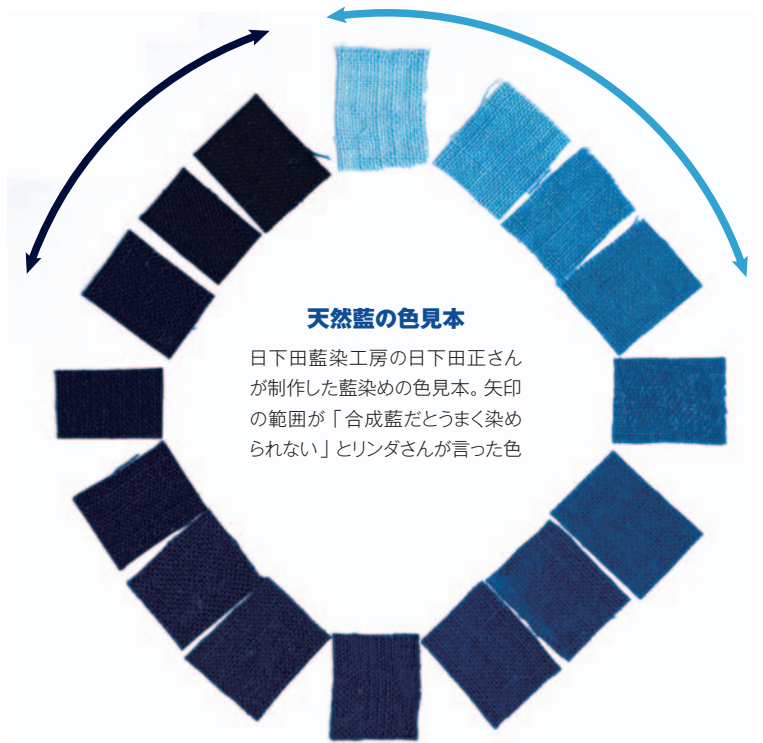
二人の恩師に教わった 藍染めの奥深さ

私は染色家で研究者でもありますが、藍にさまざまな鉱物とスクリーン捺染(注2)、蠟抜き(注3)、絞りなどの手法を組み合わせて、深く暗い色調の藍色を探索しています。

益子町は、粘土とベンガラに恵まれています。4週間の滞在期間中に藍に地元の鉱物を混ぜ合わせ、布や紙を染める実験をしたいと思っています。

藍に興味をもったきっかけは、学生時代に遡ります。美術学校の学生だった私に多大な影響を与えたのが、デリン・オーコネルとスーザン・ポーセンスという、20世紀のイギリスクラフト界を代表する二人の工芸家でした。私に藍染めの奥深さと染色の技術を教えてくれたのです。特にスーザン・ポーセンスは、私の師でもありました。

美術学校では、伝統的な手法のなかにも自分らしさを表現することが大切だと教わりました。私も講師として25年間大学で藍染めについて教えていますが、同じように学生たちの個性を大切にしよう心がけています。



天然藍の色見本

日下田藍染工房の日下田正さんが制作した藍染めの色見本。矢印の範囲が「合成藍だとうまく染められない」とリンダさんが言った色

合成藍では難しい色を出せる日本の藍染め

現在、イギリスでは藍染めに合成染料(注4)を用いますが、イギリスの藍染めの歴史にも、天然の染料を用いた時代がありました。日本でも用いられる蓼藍(たであい)ではなくウオード(大青)という植物を使うことが主流でした。その後インドからインド藍やキャリコ(注5)などが輸入され、1750年ごろから1850年ごろのイギリスでは、藍染めも含めて天然の染料を使った染め物が流行した

のです。

ところが1856年、イギリスの化学者、ウィリアム・パーキンが合成染料である「モープ」を発見したことで、繊維産業は大きく変わりました。一定量が時間をかけず安価に生産できるようになったことで、天然染料は衰退します。18世紀後半から19世紀前半、イギリスでは産業革命が起きて、技術革新によって手工業生産から工場制生産となり、経済・社会構造も大きく変わりました。いわば産業革命の波が天然染料による染めの文化を飲み込んでしまった

のです。

合成藍も天然藍と同じように、酸化により色変化します。そのため染め方は同じですが、天然藍の方が色にばらつきがなく、奥行きのある色が出せると感じています。

実は、合成藍では黒に近い濃い藍色や、きわめて淡い藍色を出すことが難しいのです。

合成藍で濃い藍色をつくる場合には、硫化鉄などの鉱物にタンニンを加えます。媒染剤(注6)としてよく使うのが、タンニンの多い柿の汁やインドのお茶です。

一方、淡い藍色は、合成藍ではムラが出てしまいます。色のムラをなくすために何度も染める必要があるのですが、結果的に良質な淡い藍色ができません。合成藍では染色の範囲が限られてしまうのです。

ところが、合成藍に対して、日本の天然藍は水色のような淡い色からとても濃い色まで染められます。色の幅がとても広いのです。すばらしいことだと思います。

これは私が益子町で藍染めをして気づいた大きな違いです。もちろん原料の違いだけではなく、日本では藍染めの技術を知り尽くした熟練職人が染めているという点も重要な要

(注4) 合成染料

石炭の残渣(ざんさ)であるコールタールを原料とした染料。合成藍ともいう。

(注3) 蠟抜き

部分的に溶かした蠟を塗ることによって抜き模様を施す技法。

(注2) スクリーン捺染

木や金属の枠に紗を張り、模様をつかった版型を用いる染色方法。

(注1) アーティスト・イン・レジデンス事業

国内外からアーティストを一定期間招聘して、滞在中の活動を支援する事業。文化施策の新しいスタイルとして日本各地で試みられている。

素だと思えます。

人を惹きつける 魔法的な藍の魅力

イギリスでは、合成藍が天然藍にとって代わりましたが、天然藍にこだわる人も少なからずいます。

藍染めの製品を求めて世界の国々へ足を運ぶコレクターなどは、藍染めのアイテムを身にまとい、インテリアにも取り入れます。季節ごとに流行が変わるファッションのような感覚ではなく、藍を愛する人は時代が変わっても藍を求めます。

思い返せば、デリン・オーコネルとスーザン・ポーセンスも藍を生活の一部にするほど好きでした。彼女たちの家に行くと、藍染めの存在が必ずどこかにあったのです。

私はこれまでにいろいろな国の藍染めに触れてきましたが、日本の藍染めは使われる道具、型紙、絞りの模様などどれをとってもとても上品です。特に、日本の型紙と絞りは最高級だと思います。

ただし、現在のイギリスでは「藍色Ⅱジャパン・ブルー」ではなく「藍色Ⅱインジゴ」の方が広く認知されています。ジーンズのイメージ

が強いですが、インジゴは東南アジアやアフリカをはじめ、何世紀にもわたり世界中で用いられてきた伝統的な染料です。

とかく時代を経ても藍が多くの人を惹きつける理由の一つに、藍染めのプロセスがあると思います。酸化によって色が変わり、何度も染料に浸すことでその色合いが深くなる。人々はそこに魔法的な魅力を感じる

のではないのでしょうか。

伝統を保つには 新たな視点も必要

私が作業している日下田藍染工房の皆さんの知識や技術、染めのプロセスはほんとうにすばらしいものです。日本の藍染めの伝統は「絶対に守るべきもの」だと改めて感じてい



① 日下田藍染工房の染め場で作業するリンダ・ブラントンさん。息を押し殺すかのように、そと布を藍甕（あいがめ）に浸けていた ② ご自身の作品を手にする日下田正さん。染からつくった染液で染める古来のやり方を守る ③ リンダさんが制作していた作品群

ます。しかし、伝統を保つことが難しいのはイギリスも同じで、天然の藍染めを知らない世代が増えていることも事実だと思います。

ヨーロッパでは絶えてしまった「天然染料による藍染め」という文化を保つにはどうすればいいのでしょうか。例えば、日本ではデパートで展覧会を開きますね。これはイギリスにはない習慣です。そこで藍染めを広く知ってもらおうのはとてもいいアイデアだと思います。日本人はすでに藍については認識していますので、テレビや雑誌、インターネットなどさまざまな手段を駆使して、天然の染料による藍染めのよさを情報として流し、興味をひくべきです。

「もっと知りたい」と思わせることで、藍染めが人々の生活に再び浸透するのではないのでしょうか。

そのためには伝統ももちろんですが、現代の新しい視点を取り入れることも大切だと思います。なぜなら伝統は、時として視野を狭めてしまうこともあるからです。

例えば、デザインや現代美術の視点を取り入れてみることも、藍染めの世界に新しい風を巻き起こす一つの策かもしれませんね。

(2016年11月17日取材)

(注5) キャリコ

刺繍や染め色が特徴的なインドの綿織り布の総称。

(注6) 媒染剤

繊維に染料を固着させる役割をする物質で、主に金属塩やタンニン酸などが用いられる。ただし植物を用いた藍染め(天然藍)には、媒染剤は不要。



現場 4



溪斎英泉「仮宅の遊女」 千葉市美術館蔵

江戸時代、庶民へ売るためにつくられた浮世絵。絵柄、表現方法は流行り廃りが激しかったが、その一つに藍色の濃淡だけで刷った浮世絵版画がある。それが「藍摺絵」。藍一色で描く手法「藍摺」は、文政末期にドイツから輸入された合成顔料によって可能となったもの。それまでの色鮮やかな浮世絵と異なる「藍摺絵」は、江戸の人たちにどう受けとめられたのか。近世を中心に日本絵画史を研究する東京国立博物館の松嶋雅人さんに浮世絵と藍摺絵、さらに藍の存在感について伺った。

浮世絵における「藍」の存在感

中世までの絵画は
権威を象徴する道具

日本の絵画はもともと、天皇や貴族の宮廷文化のなかで主に宗教的な儀式的背景として造形されたものです。手本はすべて中国から来ました。鎌倉時代に武士が台頭すると、財力を蓄えた地域の守護大名などが自らの権威の象徴として絵画を描かせます。

すなわち中世までの絵画とは、一

般庶民にはまったく縁のない、権力者を飾るための道具だったのです。

戦国時代以降は状況が変わります。江戸時代には、財を成した商人が権力者をまねて自宅を絵画で飾りました。画題もそれまでの宗教的な架空の世界のみならず、遊女や演芸や祭礼などを描いた風俗画が現れてくるのです。

江戸時代になって商業が発達すると、一般の商工階層の人たちも絵画を楽しめるようになります。通常の



歌川国貞「中万字や内 八ツ橋」 北海道立近代美術館蔵



Interview

絵画は一点ものですが、木版画の技術が生まれ、一つの下絵から数百枚、数千枚も複製品を刷れるようになり、格段にコストが下がったからです。

「浮世絵」はこうして誕生します。

喜多川歌麿、東洲斎写楽といったビッグネームの浮世絵師が活躍する江戸中期ごろには、日銭を稼いで食べるのが精一杯ではない中流層の庶民の間でも、浮世絵は流通しました。

世界に先駆けて

庶民が絵を楽しむ

浮世絵の主要なテーマは芝居町や遊里といった享楽的な場所や、遊女や歌舞伎役者などの人物画でした。

新作歌舞伎の開演前には、人気役者が演じる見どころの場面が浮世絵となって出版され、よく売れました。

この時代、庶民が絵画を娯楽として消費した国はほかになかったと思います。西洋でも中世まで絵画は王侯貴族など特権階級の文化でしたし、印刷術が発達した近代でも、絵画は出版物の挿絵としては普及しましたが、浮世絵のように単体の絵画を庶民が楽しむ風習はありませんでした。幕末以降、浮世絵が海を越えたとき西洋の人たちが驚いたのは、その

表現技法というよりも、描かれていた内容の方です。遊郭や芝居小屋で興じる人々を見て「なんと文化の進んだ国なのか」と。描かれていたのは実は富裕層なので、市民階級と

思い込んだ多少の誤解はあったにせよ、当時の西洋の人々は浮世絵の題材やそれを娯楽として消費する風習を知って、自分たちが貴族を倒してやっとな手にしたような大衆文化に先駆けて興じていた国が東洋にあったのだ、と驚いたに違いありません。

洗練を極めた「藍摺絵」も

当時は売れなかった

文政期（1818～1830年）の末に合成顔料「ベロ藍」（ベルリン藍、プルシアンブルー）が輸入され、浮世絵によく使われるようになります。それまでの多色刷の錦絵は朱色や黄色が主で、青系統はめったに見られませんが、清々しい青色を出すには、中東産の高価な鉱石が原料の「ラピスラズリ」が必要で、それを用いることができないのは將軍大名の御用絵師などに限られていました。大衆的な浮世絵にはとても使えなかったのです。蓼藍も使われていましたが、やはり高価なので少なかったのです。

そこで安価なベロ藍が普及すると、人気浮世絵師の溪斎英泉が藍色の濃淡だけで描く「藍摺絵」を始めました。

歌川国貞はこの手法をさらに洗練させた美人画を描きます。吉原を表する高級遊女が禿（遊郭に住む見習いの童女）を引き連れて客を迎えている『中万字や内八ツ橋』では、藍の濃淡だけで着物の柄を描いています。大正期の洋画家・岸田劉生は著書で「卑近な美しさは世界無比」江戸絵の粹」と絶賛しました。

版元と絵師は一種の水墨画のつもりで藍摺絵を編み出したのでしよう。現代の私たちが見てもクールでエレガントだと思いますが、当時の人々がどう受けとめたかというと、実はそれほど売れませんでした。やはり刺激の強い彩色画の方が好まれたようです。ですので、同じ版木を使い、多色刷に変えて売り出されたりもしました。

芸術性を評価するのは後世の視点で、当時の浮世絵はあくまでも「商品」。このことを忘れてはなりません。版元は人々が求める趣味嗜好に応じて絵師に描かせました。当時は印税方式がなく買い切り。売れば売れるほど版元は儲かりましたが絵

師の懐は潤いません。人気絵師が弟子を抱えたりできたのは裕福な大名などのパトロンがいたからです。遊女屋を経営していた溪斎英泉などのように、別に本業や副業をもつ浮世絵師は珍しくありませんでした。

水や空の表現に

効果を発揮したベロ藍

ベロ藍が広まると同時に、それまで美人画と役者絵が本流だった浮世絵に風景画が増えはじめます。『東海道五十三次』『名所江戸百景』などのヒット商品で風景画を確立したのが歌川広重です。広重は版木を斜めに切る「ぼかし摺り」の技法で藍色を水平線や空など背景の一部に使い、



松嶋 雅人 さん

まつしま まさと

東京国立博物館
学芸研究部列品管理課
平常展調整室長

1966年（昭和41）大阪府生まれ。金沢美術工芸大学美術工芸学部卒業。東京藝術大学大学院博士後期課程単位取得満期退学。専門は近世を中心とする日本絵画史。展覧会企画として、没後400年 特別展「長谷川等伯」、特別展「京都一洛中洛外図と障壁画の美」などを担当。著書に『日本の美術 No.489 久隅守景』（至文堂 2007）、『日本の美術 No.534 狩野一信』（ぎょうせい 2010）などがある。



葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」 千葉市美術館蔵

引き締まった鮮やかな印象を与えました。海や川の表現でも藍色は巧みな効果を出せます。葛飾北斎は『富嶽三十六景 神奈川沖浪裏』で、逆巻く荒波を白と藍のコントラストでダイナミックに描きました。発色が強くインパクトの大きいベロ藍は、風景画の点景にうってつけでした。幕末になると、風景画のほかにも花鳥画や歴史画など浮世絵のテーマ

が多岐にわたるのは、幕府の目を逃れるためでもありました。天保の改革で市中の綱紀肅正が図られ、遊郭や歌舞伎界に対してのみならず、それらを描く浮世絵へも規制が強化されたのです。それでも版元と絵師は商魂たくましく、テーマをほかに求めて人々の欲しがる浮世絵を世に出しました。

広重や北斎の風景画がよく売れたのは、ガイドブックの役割を果たしたからでもあります。幕末にかけては関所を越える移動の縛りがゆるめられ、女性でも自由に旅ができるようになりました。広重の風景画などは大胆な構成と色づかいで現実の風景をデフォルメしていますから、実際に現地へ行っても同じ景色はあり得ないのですが、当時の人々はおそらく「広重の絵の通りだ」と思ったに違いありません。『名所江戸百景 水道橋駿河



歌川広重「名所江戸百景 水道橋駿河台」

国立国会図書館蔵

台』などは、前景に縦長画面を覆う巨大な鯉のほり、中景に神田川の水道橋、遠景に富士山を配した極端な近接拡大の遠近法構図で視覚効果を高めています。浮世絵のイメージの方が現実に投影されるほどインパクトが強かったので、美人画や役者絵ほど刺激のない風景画でもヒットしたのででしょう。

江戸時代を通じて浮世絵は膨大に大量生産されました。今、残されている作品は氷山の一角にすぎません。版元も絵師も競争し切磋琢磨するのデカオリティはどんどん上がり、幕末の人気絵師、歌川国芳の絵一つとっても、描かれている情報量があまりに多すぎて、現代の私たちがすべて説明しきれないほどです。明治以降、浮世絵に取って代わったのは写真や映画など西洋から入ってきた文物。浮世絵が廃れたわけではなく、たんに娯楽が多様化したのです。戦後日本でマンガやアニメーションが隆盛を極め海外へも波及したのは、元をたどれば江戸時代、世界に先駆け娯楽商品として浮世絵を受容する文化の伝統があったからと言っても過言ではありません。その浮世絵も一時代を画した娯楽の一つですが、藍摺のような洗練された技法も含め、これだけレベルの高い文化が庶民の生活を彩っていたことに、改めて驚かされるのです。

(2016年12月21日取材)

暮らしに根づいた日本の「藍」

編集部



文化をつくる

青系統でもっとも種類が多いのは「藍」

「水の文化」を「色」で切り取るとうなるか——それが今回の特集の出発点だった。

私たちの暮らしは、さまざまな色で彩られている。無色透明なものも空気と水くらいなものだろう。しかし、水には色がないはずなのに「水色」という色名がある。福田邦夫著『新版色の名前507』（主婦の友社 2012）によると、水色は「川や池や湖沼などの水の色からとられた」ものであり、「透明な澄んだ色でなければ」美しい色に見えないという。

水色は言うまでもなく青系統の色だ。青は、黒、白、赤とともに最古の基本色彩語とされ、黄、緑、紫などはあとからできた。青はさまざまな系統色がつくられてきたが、そのなかでも特に藍色は種類が多い。それは庶民の暮らしに深く根ざした色だったからだ。

日本を「ジャパン・ブルー」と呼んだアトキンソンだけでなく

く、1890年（明治23）に来日したパトリック・ラフカディオ・ハーン（日本名・小泉八雲）も、衣服のみならずのれんなどにも濃い藍色が多く使われているのを見て、「この国日本は神秘的なブルーに満ちた国」と書き残している。

畑で種から育てた葉を手間暇かけて染料に

明治初頭の外国人たちにそう言わしめたのは、日本にはタデ科の植物、蓼藍（たぐい）を発酵させて薬をつくり、それをさらに発酵させて染液とする天然由来の藍染めがあったからだ。

蓼藍は畑に種を蒔き、雑草を手で取り除きながら育てる。「やみくもに畑の面積を広げても、収量が上がらるわけではないんですよ」と教えてくれたのはBUAISOUの渡邊健太さん。いい葉っぱに育て、かつ適切な時期に刈り取る管理が大切なのだという。

そして、刈り取った葉を発酵させて薬にするが、民俗学者の

竹内淳子さんは「薬という字は漢字ではなく国字。つまり薬は日本独自のものなのです」と言った。蓼藍は、「インジゴ」と呼ばれるインド藍に比べると藍色の色素をさほど含んでいない。そこで、少しでも効率よく染めるために、先人が苦労を重ねて編み出したものだった。

編集部は、阿波藍の産地だった徳島県藍住町の「藍の館」で、薬からつくった自然の染液による藍染めを体験した。手を入れたとき、温かくてぬるっとした感触に戸惑った。意外なことに布は緑色に染まる。ところが後処理で水に晒すとたちまち青く変わる。思わず「おおー！」と声が出たが、色の濃淡は染液に浸ける回数で調整するそうだ。薄い色にしたければ少なく、濃い色の場合は多く浸すのがセオリー。しかし、BUAISOUの椿寛郎（かひろ）さんは「薄い色に染めたいときは、新鮮な染液にほんの数秒浸すよりも、個人的には古い染液に何度も浸けたいです。染液の状態に見合った色に染める方が藍はしつかり食いつくし、

自然なやり方だと思っ

「と話す。藍色をつくる人ならではの言葉だった。」

身のまわりの品々に今も息づく土着の色

着物や浴衣など伝統的な領域ではなく、今のライフスタイルで藍色がどう使われているのを見ることが、藍とはどんな存在なのかも探った。

言うまでもなく日本はジーンズでは後発国。それでも世界市場に打って出た株式会社ジャパブルーの眞鍋寿男さんは「100年程度の遅れなら、日本人は追いつくし、きっと追い抜ける」と言い切る。眞鍋さんもまた天然藍に魅せられた人だった。

一方、特に藍色を意識したわけではないが、海外に出てみれば、日本の伝統色である藍色は外せないと考えたのは、腕時計ブランド「SPQR」を生み出した清水新六（しずみ）さんだ。清水さんは「藍は気持ちが悪く落ち着きません」と言い、文字盤を藍色の漆で塗

りながら荻上文峰（おぎうぶんぼ）さんの色なので愛着を感じますね」と話す。

荻上さんが口にした「土着の色」。これこそが日本の藍色を端的に表す言葉なのかもしれない。畑で種から育てた藍色は、江戸時代にも発令された奢侈（しほ）禁止令では不思議と規制されなかった。紫色や赤（紅）色はダメだったにもかかわらず。裏を返せば、それだけ人々の暮らしに欠かせない色だったといえる。

そして、藍色は青い海に囲まれた島国の自然とつながった色であることも認識できた。冬には流水が押し寄せる北の大地から、色とりどりのサンゴ礁がある南の島まで、この列島には美しい風景が溢れている。その自然が藍色を多様にしたのであれば、この美しさを保ちつづけることも意識しなければならぬだろう。

ふとまわりを見れば、そこかしこに藍色は潜んでいる。一見地味だが、藍色はやはり今も日本が世界に誇れる色といえるのではないか。

イギリスの川と水

イギリスの川と橋

イギリスは、イングランド、ウェールズ、スコットランド、及び北アイルランドからなり、人口6511万人（2015年現在）、面積24万3610㎢、国土は日本の3分の2程度であり、森林率はおよそ11%、可住地率約85%に及ぶ。

エイヴォンという本来「川」の意味をもつ名前をつけた川がグレートブリテン島に八つ、イングランドに三つ流れている。飯田操著『川とイギリス人』（平凡社・2000）では、シェイクスピア・エイヴォン川の異名をもつアッパー・エイヴォン川は、ノーサンプトンシャーにあるエイヴォン・ウエルと呼ばれる泉を発し、西に向かって流れてウォリックシャーに入り、数々の村を過ぎ、シェイクスピアの故郷のまちを過ぎ、やがてセヴァーン川に合流するとある。この書は、動力としての川について、粉ひき水車、羊毛立国と水車、アークライトの水力紡績機などを挙げ、イギリス発展の基礎をつくり出し、さらに運河の建設で川と結ばれ、輸送手段としてイギリスの経済を増大させ、やがて道路と鉄道に替わり、川と運河は親水空間としての憩いの場と変化したと論じる。

飯田操著『釣りといギリス人』（平凡社・1995）では、16世紀、釣りは主に生活を支えるためのものであった。1653年ウォルトンが著した『釣魚大全』の特徴は、一つのレクリエーション（釣り）からもう一つのレクリエーション（瞑想）を生み出したことであり、田園を楽しむ気分結びついた宗教性も含まれている。18世紀はスポーツとしての釣りの発展、19世紀は疑似餌で釣るゲーム・フィッシング、20世紀の釣りは野生への憧憬として変遷する。哲学的な思索で捉えるイギリス人の釣り文化の深さが潜んでいる。



古賀 邦雄 さん
こが くにお

古賀河川図書館長
水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公団（現・独立行政法人水資源機構）に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。

三谷康之著『事典・イギリスの橋―英文学の背景としての橋と文化―』（日外アソシエーツ・2004）では、中世は政治・社会情勢の不安定から旅も危険性が伴い、旅の安全面の便宜を図るために、修道士の団体による橋や道路の普請が行なわれ、橋の上には礼拝堂が建てられた。ブラッドフォード・オン・エイヴォン橋は、イングランド南部のウイルトシャー州の町ブラッドフォード・オン・エイヴォンを流れるエイヴォン川に架かる。全部で九つのアーチをもち、小さな礼拝堂も建てられた。戦橋は、戦争の際、敵の侵攻を防ぐために、橋に門塔、落とし門を設けたマノウ橋、ウォークワース橋を挙げる。石の文化を感じさせる。

小川和彦著『テムズ川橋ものがたり』（武蔵野書房・2006）は、ビッグ・ベンと大観覧車のウエストミンスター橋、シネマ「哀愁」の橋務の街のウォータールー橋、文豪漱石の歩いた道のロンドン橋から塔橋を巡り、その魅力を述べる。

テムズ川の流れ

テムズ川は、その源をコッツウォルズ丘陵南部、グロスタシャー州サイレンセスター近郊のケンブルとコーツのほぼ中間、テムズヘッドと呼ばれる場所（標高110m）に発する。多数の川と合流して、ロンドンに至り、サウスエンドで北海に注ぐ。長さ346km、流域面積1万2935㎢であるが、河口部で右岸から合流するメドウェイ川を支流とみなすと流域面積は1万6343㎢となる。メイデンヘッドからウインザー間には、洪水時の流下能力を目的とした長さ約12kmの二次水路・ジュビリー川が2002年に開削、また、キングストンからリッチモンドの間、河口から約89kmの地点にはティンソン水門が設置

されている。これより下流は感潮域になっている。ウーリッジ上流には、テムズバリアと呼ばれる防潮堰が1984年に設置された。

徳仁親王著『テムズとともにー英国の二年間』(学習院総務部広報課・1993)では、テムズ川水運の変遷を論じる。製粉業者の水車の利用から、石炭の運送、上流からモルトがロンドンに運ばれ、また植民地産の砂糖、タバコ、米、茶の物資などが輸送された。しかし19世紀、石炭などが鉄道運送、トラック貨物輸送に移り、水運が次第に衰退していく過程を捉える。相原幸一著『テムズ河ーその歴史と文化』(研究社出版・1989)には、テムズヘッドの上流からロンドン・河口まで巡り、テムズ・セヴァン運河、マグナ・カルタ調印の地ラニミード、日本の唐門と虚子の句碑「雀等も人を恐れぬ国の春」など、事細かにまとめられている。岩崎広平著『テムズ河ものがたり』(晶文社・1994)も、テムズ川の流れを上流から河口まで綴った歴史紀行の書である。岡本誠著『テムズ川ウォーキング』(春風社・2004)は、オックスフォードからウインザーまでの120kmを踏破した記録を綴っている。

ガヴィン・ウエイトマン著『テムズ河物語』(東洋書林・1996)がある。この書のなかに洪水の記録がある。昔からテムズ河は氾濫して堤防を越え、建物を破壊し、住人と家畜を溺れさせてきた。その状況は河口から始まってはるか上流域に至るまで変わらない。この災害は古くローマ時代まで遡るといふ。1953年には、東海岸に悲劇的な洪水を起こし、16万エーカーの農地と200の工場、200マイルの線路、水死者は300名を超えた。その後も1968年、1974年、2003年と起り、2007年の洪水では英国南部で約35万人が断水被害を受け、5万世帯が停電をしている。最近では2014年2月ロンドン市に被害が生じ、一部の地域では1カ月以上も洪水の影響を受けた。地球温暖化が進むなか、イギリスの河川は水害・高潮の被害を受けやすくなってきている。小説としては、リチャード・ドイル著『ロンドン大洪水』(サンリオ・1982)がある。

イギリスの水都

人間や家畜などの糞尿、ゴミが衛生的に下水などで処理が不可能となった場合、都市の機能は完全に喪失する。人口増のヴィクトリア朝の時代、ロンドンの30万頭余りの馬車によって馬糞が道路を汚し、馬車で削られた石、鉄分で道路は霧が出るとべたつき、衣服や目や喉を痛めた。また、家庭からのゴミ処理、し尿処理も滞り、墓地、入浴場、公衆便所も不衛生的で清掃されず、大気汚染、伝染病コレラも蔓延し



た。リー・ジャクソン著『不潔都市ロンドンーヴィクトリア朝の都市浄化大作戦』(河出書房新社・2016)で、テムズ川の汚泥と悪臭の状況も論じながら、下水道などの整備を図ったことを述べる。ヒュー・バーティン著『英国上下水道物語ー人間と都市を救い育てた苦闘の歴史』(日本水道新聞社・1995)がある。

イギリスは世界に先駆けて産業革命を成し遂げた。革命後もイングリッドランド南西部に立地する港町プリストル市は栄える。石神隆著『水都プリストルー輝き続けるイギリス栄光の港町』(法政大学出版局・2014)は、エイボン川を中心にプリストル市の発展を論ずる。プリストルは天賦の好条件に恵まれたわけではなく、操船に難が生じる強い潮流をもつエイボン川に、潮汐差を船の推進力として利用することによって港町として栄える。だが、商業船の大型化によりこの潮汐差がネックとなり、これを解消するためにフローティング・ハーバーが建設され、さらに川港の制約から、市の活性化のため河口部での新港の建設がなされ、現在でも繁栄していると論じる。樋口正一郎著『イギリスの水辺都市再生』(鹿島出版会・2010)は、マンチェスター、バーミンガム、リバプール、プリストルのウォーターフロントの環境デザインについて活写する。

運河と湖水地方

田中憲一／文・写真『イギリス・水の旅』(東京書籍・1996)、秋山岳志著『イギリス式極楽水上生活ーナローボートで楽しむ爽快クルーズ・ライフ』(光人社・2006)は、運河をこよなく楽しんでいる。また、ピーターラビットを描いたビアトリクス・ポターがナショナルトラストをおこし、美しい湖が維持されているカンブリア州の湖水地方については、辻丸純一／文・写真『英国Ⅱ湖水地方四季物語』(東京書籍・2000)、北野佐久子著『ピアトリス・ポターを訪ねるイギリス湖水地方の旅』(大修館書店・2013)、静子・ヒューズ著『イギリス湖水地方に暮らして』(メディア総合研究所・2002)があり、水と緑と空の造形を捉えた田路貴浩著『イギリス風景庭園』(丸善・2000)も刊行されている。

以上、イギリスの川と水について述べてきたが、やはりテムズ川が中心となる。今日のイギリスの文化、政治、経済の発展は、テムズ川なくして成立し得なかった。

〈倫敦塔裏のテムズに海燕〉(瀧春一)

こたつで食べる冬の風物詩 でっち羊かん

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回は、福井県大野市の「でっち（丁稚）羊かん」を取り上げます。水が豊かな大野市ならではの伝統的な和菓子ですが、その不思議なネーミングと冬にだけ食べる理由を知るために訪ねました。

黒糖と丁稚をかけた 意外なネーミング

まちを歩くと、いたるところに「清水」と呼ばれる湧き水が目につく福井県大野市。四方を取り囲む白山山系に降った雨や雪解け水が伏流水となって湧き出し、今も各家庭では地下水をくみ上げて生活に利用している。

福井県では冬になるとこたつに入って水羊かんを食べる習慣がある。大野市ではこの水羊かんのことを「でっち（丁稚）羊かん」と呼ぶ。箱に敷き詰められた分厚く瑞々しい水羊かんを付属のヘラで切り分けて食べるのだ。練り羊かんの約2・5倍の水分を含むでっち羊かんは、大野の名水を活かした伝統の和菓子だ。

御菓子処 伊藤順和堂の伊藤武治さんが、でっち羊かんの名の由来について教えてくれた。

特徴は黒糖が使われていること。

砂糖は、純度の高いものから順に、白双糖、上白糖、三温糖、黒糖に分かれる。一方、江戸時代の商家では、上から旦那、番頭、手代、丁稚の順。つまり黒糖も丁稚も4番目にあたる。「黒糖はいろいろな成分が含まれる分アクも強いですが、栄養がありま



1



3

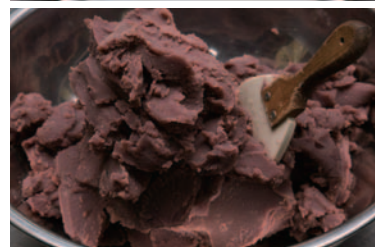
1 朝市で有名な七間通りにある「七間清水」。このような湧き水はそこかしこで見られる 2 でっち羊かんの謂れを話す御菓子処 伊藤順和堂の伊藤武治さん 3 製造現場を見せてくれた毎川金花堂3代目の毎川利和さん 4 大野市菓子組合が開発したでっち羊かんの専用箱とキャラクター



2



4



毎川金花堂がでっち羊かんで用いる材料。上から波照間島産の黒糖、寒天、そして練り上げた餡 ① 数時間かけて戻した寒天を湯に入れ、そのあとに黒糖、最後の餡を加えてゆっくり混ぜる ② 鍋から寸胴に移し、水を流しながら41度になるまで冷やす。寒天と餡が分離ないように、かき混ぜる手を休めない ③ 寸胴から取り出し、重さを量りながら専用の箱に注ぐ ④ 少し時間を置いて、固まってから冷蔵庫にしまう

羊かんは糖度を高めることで一年中販売するところが多いが、大野市のでっち羊かんは冬季限定だ。そもそも「夏じゃなくて冬に水羊かん？」と不思議に思うかもしれない。それは水分の多さに関係がある。大量の水分を含むでっち羊かんは練り羊かんに比べて傷みやすい。冷蔵庫が普及する前、大野市の冬（気温0〜10度）は天然の冷蔵庫だった。だからでっち羊かんは冬に食べるもの。その名残から、今も外気温が15度以下にならないとつくらない。「家族そろって、温かいこたつで冷たいでっち羊かんを食べるのがなんともいえないおいしさなのです」と

冬だけに食べる 一家団欒の味

伊藤さんによると、でっち羊かんは江戸時代末期からあった。丁稚は年に一度、正月明けに奉公先から里帰りする。奉公先に戻るとき、でっち羊かんを土産として持ち帰ったことで知られるようになったという。

「寒天を戻す、餡を練る、冷ますなどの工程には良質で大量の水が欠かせません。大野市の地下水は軟水で甘みもあり、口当たりもまろやか。この水がでっち羊かんをおいしくする最大の要素です」（利和さん）

水分たっぷりなので、その大きさ・重さの割に安価なのもうれしい。口のなかでさらりととろけるでっち羊かん、ぜひ一度ご賞味あれ。

（2016年12月19日取材）

伊藤さんは笑う。

でっち羊かんは、年末年始に家族そろっての団欒時、あるいは来客時など特別なときに食べることが多い。「クリスマスのはではでっち羊かんがもっとも売れる時期です」と話すのは、でっち羊かんの製造元の一つである毎川金花堂3代目の毎川利和さんだ。もともとは和菓子屋で利和さんが洋菓子中心に切り替えたが、2011年（平成23）の冬、伝統の味であるでっち羊かんを復活させた。

毎川金花堂がでっち羊かんを製造するのは主に11月〜2月。「黒糖と餡を寒天で固める製法はどこも同じですが、黒糖と餡の種類、甘さは店によってさまざま」と利和さん。すべての工程が手作業のため、片時も目が離せない。



毎川金花堂

福井県大野市新庄 14-16-2
Tel. 0779-66-2746
9:00 ~ 20:00（火曜休）

伊藤順和堂

福井県大野市元町 9-21 七間商店街
Tel. 0779-66-2125
8:00 ~ 17:00（不定休）

A traditional Japanese garden scene. In the foreground, a stream flows over a series of large, rounded, moss-covered stones. The water is dark and rippling. To the right of the stream, a path of smaller stones leads towards a cluster of tall, thin bamboo stalks. In the background, a dark wooden building with a traditional Japanese architectural style is visible. A large, gnarled tree trunk is on the left, and another tree trunk is on the right. The ground is covered in green moss and some fallen brown leaves.

水・舟運そして
パーソナルネット
ワーク資本へ

山形県長井市



人口減少期の地域政策を研究し、自治体や観光協会などに提案している多摩大学教授の中庭光彦さんが「おもしろそうだ」と思う土地を巡る連載です。将来を見据えて、若手による「活きのいい活動」と「地域の魅力づくりの今」を切り取りながら、地域ブランディングの構造を解き明かしていきます。その土地ならではの魅力や思いがけない文化資産、そして思わぬ形で姿を現す現代の水文化・生活文化にご注目ください。今回は、かつて最上川舟運の湊として栄えた山形県長井市を訪れました。

創造する水路のまち

水が生産者を惹きつける

山形県長井市は水のまちだ。

長井の骨格は江戸時代中期、最上川舟運による大商人の成長、最上川支流・野川の治水、そして良質な水。この三つから成立した。それだけなら「今も残る水文化都市の魅力」の話のだが、今回紹介するのは、この地方都市に、40歳代を中心におもしろい発想をしている人々である。

長井市の人口は約2万7700人。合計特殊出生率は1・56（2015年）と、全国平均を上回っている。ここで魅力ある地域文化をつくらうとしている人々を紹介しよう。

魅力づくりの教え

長井という地名は、「水が集まる地」

を意味している。福島県浪江町請戸で営業していた鈴木酒造店は天保年間には操業を始めていた。しかし、2011年（平成23）の東日本大震災で建屋が消失。そのころ、水のよい長井では、1931年（昭和6）に創業した東洋酒造が営業をやめることになり、鈴木酒造店は東洋酒造の株式を取得し、新たに「鈴木酒造店長井蔵」として再出発した。

酒造りは土地の風土の産物だ。浪江の標高はほぼ0mに近かったが、長井は200m弱ある。このため、米を蒸



「長井は水に恵まれていますね」と語る株式会社鈴木酒造店 長井蔵の鈴木大介さん。福島県の浪江町から長井へ来て再出発した



昭和初期創業の東洋酒造を譲り受けた「鈴木酒造店長井蔵」の外観

すときに沸点が違う。水も浪江は硬水で、海が近いからクロール（Cl⁻）電解質成分の一種が多くなる。溶けやすかった一方、長井は軟水。輪郭がある軟水で、一長一短あると専務の鈴木大介さんは言う。

「すごいと思ったのは、常温貯蔵すると普通は美味になるが、ここは味がきれいになっていく。水源地の朝日連峰も、白神山地の五倍のブナ林がある。水に関してはほんとうに条件がよい」

酒米を仕入れている農家四軒のうち三軒には後継者もいるので、この水と高品質の米でよいものをつくり、次の

中庭 光彦 さん

なかにわ みつひこ

多摩大学経営情報学部事業構想学科教授

1962年東京都生まれ。中央大学大学院総合政策研究科博士課程退学。専門は地域政策・観光まちづくり。郊外や地方の開発政策史研究を続け、人口減少期における地域経営・サービス産業政策の提案を行なっている。並行して1998年よりミツカン水の文化センターの活動にかかわり、2014年よりアドバイザー。主な著書に『オーラルヒストリー・多摩ニュータウン』（中央大学出版部 2010）、『NPOの底力』（水曜社 2004）ほか。

呉服屋「いちまた」でデニムの着物を羽織る中庭さん。腰に巻いているのは帯ではなくガンベルト。新しい和装の提案といえる

長井市あら町にある「やませ蔵美術館」の庭園を流れる水路。300年の歴史をもつ袖問屋・山清が、五つの蔵を美術館として開放する





古くから舟運が行なわれ、この地方の重要な交通路だった最上川

最上川舟運最上流の湊

世代につなげていきたいと今の思いを話していただいた。
まさに酒造店にとって水は資本そのものだ。

長井の水資本を形成したのは、江戸時代の米沢藩と商家たちだ。
長井は上杉家米沢藩領だった。江戸



最上川的主要河岸と舟着場

横山昭男著「最上川舟運と山形文化」(東北出版企画 2006) p.27 を参考に、国土交通省 国土数値情報「河川データ(平成19年)、行政区画データ(平成28年)」より編集部作成

- 港
- 主要河岸
- 主要舟着場
- 主要都市



「宮舟場」の跡地。上杉氏が治める米沢藩の舟運基地として発展した

初期、米沢藩の課題は食料増産と米の物流路確保であった。
地図を見ると、米沢から河口の酒田が最上川で結ばれているように見えるが、途中の荒砥付近は流れの速い浅瀬で通船が不可能だった。このため米沢藩の御用商人西村久左衛門が川筋普請を行ない、1694年(元禄7)に開削した。これにより宮村(現・長井市)から米を積み出すことができ、御陣屋

魅力づくりの教え

「やまいち松龍園」の引き水。奥は池になっていてコイが泳いでいた



デニムの着物姿で話をする呉服屋「いちまた」の八代目・斉藤直也さん。下は敷地内にある引き水



と上米役場が設置された。

宮村より上流は、水量が多い時期が短いこともあり、米沢藩の最上川舟運の起点が現在の長井だった。

「宮舟場」から積み出す荷物は米、材木、蠟、酒田からの上り荷は塩、砂糖、古手物(中古衣料)、いさば物(干魚)で、これらを取り扱う問屋商人が、宮、そして後につくられた「小出舟場」、すなわち現在の長井に集まり発展した。こうした大店がつくった商いの空間の一つが、今も残る「あら町」だ。山清は江戸時代から続いた細問屋で10ある蔵の5棟を今は美術館としている。「やませ蔵美術館」だ。水路が這う庭は見事で、往事の富を想像することができる。

る。

ほかにも1789年(寛政元)創業の山一番油店。1907年(明治40)創業のお茶屋「やまいち松龍園」。その並びには江戸時代から続く着物屋「いちまた」。どの大店にも奥に庭園があり、引き水されている。池にはコイが泳いでいる。
「いちまた」社長の斉藤直也さんは八代目だ。ちよつと風合いが異なる着物をお召しだったので伺うと、デニム生地を紅花で染めたもの。しかも帯ではなくガンベルトをしていらつしやる。
「若い方が、普段着やすい着物を提供したい」と新たな商品を提案されている。値段は3万円。一ヶタ違いで安い。



野川の洪水から長井を守った「平山の締切堤防」の遺構。総石積みで、長さは450mにも及ぶ



野川と長井の関係について解説するNPO最上川リバーリズムネットワークの代表理事、佐藤五郎さん

着てみたいと思える逸品だった。

長井を守った締切堤防

今に至る大店の水利空間をつくり出した最上川舟運だったが、当初は心配もあったろう。というのも、ここは野川の洪水の危険にさらされていたからだ。

1757年（宝暦7）、1769年（明和6）と大水害に襲われている。長井の中心を流れ最上川に注ぐ野川は暴れ川だった。

現地に立つとわかるが、野川は朝日連峰に源を發し南下するが、急に東に屈曲し長井に入り扇状地を形成し最上川に流れ込む。NPO最上川リバーリズムネットワーク代表理事の佐藤五郎さんによると、20kmの間を1400m下るといふ。溢れないわけがない。川筋が安定しなければ、長井の商いは

育たないばかりか村そのものが荒廃してしまふ。

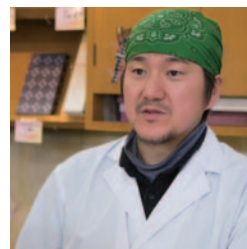
そこで造営されたのが「平山の締切堤防」。1775年（安永4）に竣工した。野川が平野部に出る扇頂部の右岸に野面積みによる大堤防をつくったのだ。これが現在も残っている。

1906年（明治39）にも大修復されている。このおかげで野川の河道が固定され、商都としての基盤が整った。生産力を維持する開発努力を、この遺跡は教えてくれる。

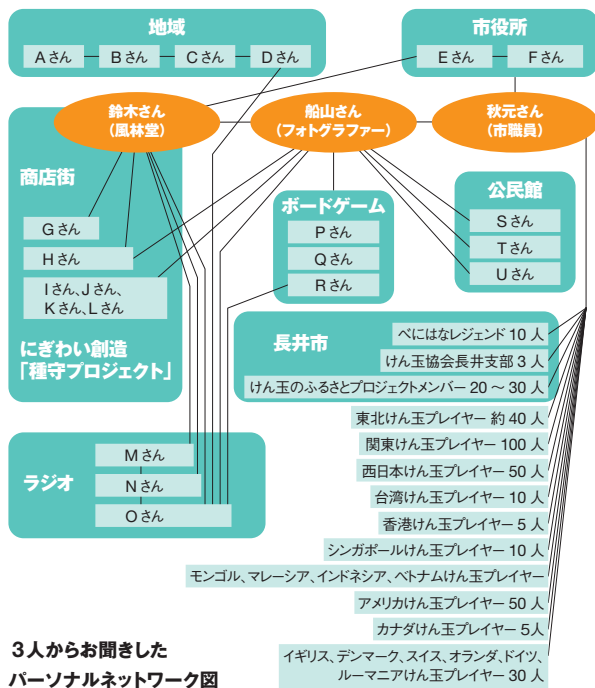
きれいな水の条件が洪水の要因にもなる。日本にはこうした場がいくつもあがるが、長井もその一つであった。

若手中堅のネットワーク

この長井市は、現在おもしろい活動が連鎖しており、実際にそうした人々に話を伺った。と私が書いても、なか



和菓子「風林堂」の四代目・鈴木英明さん。「俺たちの株式会社 楽街」を立ち上げて、長井のまちなか活性化に取り組む



なか伝えるのが難しい。地域づくりというのは、人のネットワークが地域資源を適切に利用し価値を生み出すことで、事例ごとに特徴がある。そこで、今回は若手活動者として活躍されている3人にお話を聞き、それぞれ5分ずつ人脈図を書いていただいたものを合成して一つの人のネットワーク図をつくってみた。

最初にお話を伺ったのは、和菓子「風林堂」の鈴木英明さんだ。1912年（明治45）創業で、四代目主人だ。長井にはお茶の先生が多いというのだが、地元では茶席と菓子の代名詞が風林堂だといふ。

鈴木さんはもう一枚名刺を出された。

「俺たちの株式会社 楽街」。自分たちのまちは自分たちでおもしろくする、とイベントを行ない、定期的に情報交換を行なう姿がSNSで伝わってくる。主に空き店舗利用を進めている。

次は秋元悟さん。東京都青梅市出身だが、地域おこし協力隊として市役所商工観光課に所属する。と書くとき普通だが、この方、世界的に有名な「けん玉のレジェンド」なのだ。

長井市は競技けん玉生産日本一のだが、秋元さんはけん玉パフォーマー大会で2回優勝し、2014年（平成26）に開かれた第1回けん玉ワールドカップでは3位に入賞している。ちなみに、この時の1、2位はアメリカの選手だった。これを聞いて、けん玉競技人口の世界的な広さに驚き入ってしまった。

長井駅前に「けん玉ひろばスパイク」がある。いわば道場のようなものだが、上達するにつれ、級、段が上がっていく。「これからはけん玉をする人を増やし、外から長井に引き込み、知ってもらいたい」と話す。

やる気の貯金

三番目にお会いしたのは、フォトグラファーで長井青年会議所まぢみらい

委員会担当理事の船山裕紀さんだ。

高校まで長井の中心部に住んでいて、その後東京に出たが数年で長井に帰り、バンド活動をしているうちにフォトグラファー、デザイン、企画が仕事になってきたという。

今は長井の北西部にある西根の草岡新町の空き家に入り住んでいる。船山さんが言うには「ここは周囲と比べても出生率が高く、市のほかの場とは様子が違う。調べてみると、僕らの世代が子どもを産んでいる。つまり、僕らの親世代が祭りなどをやって僕らに帰

長井市でお会いした人々



取材をコーディネートしてくれたやまがた長井観光局観光交流推進部長の平正行さん(右)と主事の布川はるかさん(左)



語り部の会「長井小町の会」の金田茂子さん。会員17名で市内の全小学校を回って昔語りを聞かせている



まちなかを案内してくれた観光ボランティアガイド「ながい黒獅子の里案内人」会長の田中健三さん



突然押しかけたにもかかわらず快く迎えてくれた質上(ぼうじょう)醤油味噌醸造元の井上雅晴さん



長井の「ソウルフード」とも称される「ロールパン」。それをつくりつづける木村家本店の深澤勝洋さんと奥様の悦子さん



長井市地域おこし協力隊の秋元悟さん。「けん玉のレジェンド」として、さまざまな地域・国から人を呼び込もうと考える



長井青年会議所 まちみらい委員会の担当理事、船山裕紀さん。本業はフォトグラファー。活動が人とのつながりで連鎖しはじめてい

魅力づくりの教え

属意識を植え付け、僕らはその影響で戻ってきているのではないか。

そのことがわかるのが草岡新町だ。長井市の中心部では消えたような、コミュニティの契約関係が草岡新町には今も濃厚に残っているという。コミュニティの共益費も月数千円払っている。その結果、人が居つづけており、これを船山さんは「やる気の貯金」と表現した。

同じ事を市内でも広げるため、船山さんは「ぼくらの文楽」というお祭りを仲間と開催している。長井に住む人および活動する団体が出演し、市内外から毎年およそ3000人が集うイベントだ。

地域を動かす人々、そして資源

この3人に書いていただいたパーソナルネットワーク図を見ると、いかに多くの人々が長井でつながっているのかがわかると同時に、つながりが多い人、つまりハブになっている中心者もわかってくる。この3人が多いのは当然なのだが、そのほかにも中心者がいる。こうした人は、外の世界の人々との橋渡し役でもある。

秋元さんは、けん玉の世界ではグロ

ーバルネットワークをもっているのだが、これをどう長井市につなげるのか、船山さんたちの腕の見せどころかもしれない。

このようにパーソナルネットワークは主人公でもあり、資源でもある。

元気な地域に共通しているのだが、なぜかおもしろい人はみんな自営業だ。しかも長井では江戸時代からの商人の末裔たちが、舟運ではなく、SNSとアナログ、両方のネットを使って情報を商いしている。

長井には、物流・交流拠点として文化に結晶した「商いの歴史遺産」、「おもしろい事業を創発する人々のネットワーク」、「水のおいしさという、地域資本」が複合している。水のおかげで電子部品などの中堅企業も、多数立地した。

つまり、心配しないでおもしろい取り組みができるという魅力が湧き出ている土地だった。情報を流す水路のま

魅力づくりの教え

安心を生む水資本は、情報から価値を生み出す商人的活動をも後押しする。

(2016年12月26〜27日取材)

坂本ケンと行く川巡り 第12回 Go! Go! 109水系

大地を削って「遠回り」する 肱川

ひじかわ

川系男子 坂本貴啓さんの案内で、編集部の方々が全国の一級河川「109水系」を巡り、川と人とのかわりを探りながら、川の個性を再発見していく連載です。今回の原稿は、博士論文の執筆に奮闘中の坂本くんにかわって、編集部がまとめました。

109水系

1964年(昭和39)に制定された新河川法では分水界や大河川の本流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したもの」(河川法第4条第1項)を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。



肱川「源流の碑」と坂本くん

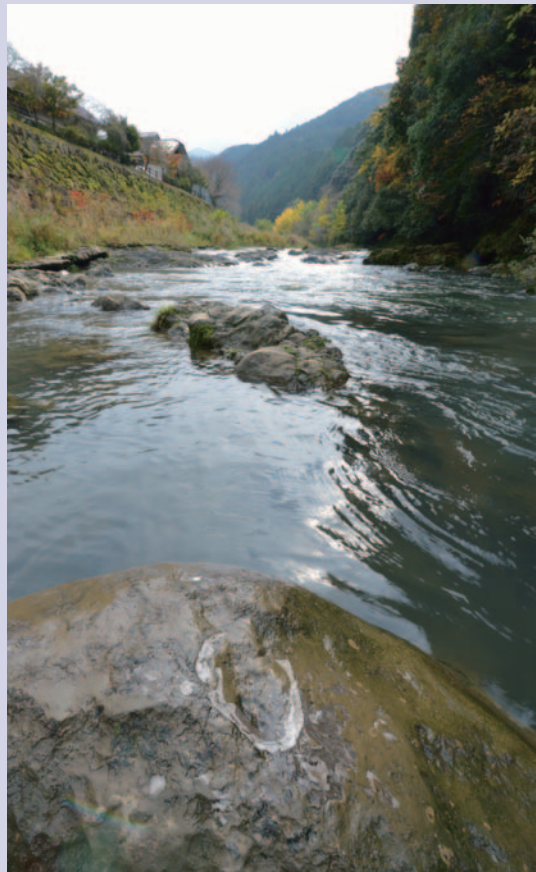
坂本 貴啓 さん
さかもと たかあき

筑波大学大学院
システム情報工学研究科
博士後期課程
構造エネルギー工学専攻 在学中

1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ちはじめ、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代にはJOC(Joint of College)を設立。白川直樹研究室「川と人」ゼミ所属。河川市民団体の活動が河川環境改善に対する潜在力をどの程度持っているかについて研究中。

【肱川流域の地図】

国土交通省国土数値情報「河川データ(平成20年)、流域界データ(昭和52年)、ダムデータ(平成26年)、鉄道データ(平成27年)」より編集部で作図



「道の駅きなはい屋しろかわ」の裏手を流れる黒瀬川。手前の岩に貝やサンゴなどの化石が見える



「四国西予ジオパーク」推進協議会事務局長を務める西予市役所の高橋司さん

ぐるりと遠回りする

不思議な川

「四国におもしろい川があるんですよ」と切り出した坂本くん。川は源流からもつとも近い海に向かって流れることが多いですが、愛媛県には源流から内陸に向かって流れ、ぐるりと遠回りする不思議



肱川の源流付近。森の奥から流れ出た水は、野村盆地へと向かう

な川があるそうです。その名は

「肱川」。上空から見ると、反時計

回りに円を描くように流れたあと、スツと北に進路を変えて瀬戸内海に注ぎます。

肱川は愛媛県西予市の鳥坂峠を源として大洲市の長浜地区まで流れる103kmの川ですが、実は源流から河口までの直線距離はたったの18km。いかに遠回りしているかがわかります。

「肱川は四国の造山活動に関係がありますし、この時期は『肱川ありし』と呼ばれる霧も発生します。地形や気象を知るには絶好の川なんですよ」と目を輝かせる坂本くんとともに、編集部は愛媛県へ向

かいました。

肱川を形づくったプレート活動

プレート活動

なぜ肱川は遠回りするのでしょいか。それは四国を形づくった太平洋の海洋プレート活動と、それによって運ばれる「付加体」と呼ばれる地質帯が関係しています。「四国西予ジオパーク」推進協議会事務局長を務める西予市役所の高橋司さんに話を聞きました。

「四国の南側の海底にあるプレートは絶えず四国の下に沈み込んでいくので、プレートの上にある砂や泥などの堆積物や海山がベルト

コンベアのように運ばれてきて四国に押し寄せています。これが『付加体』。長い年月をかけて集積した、いくつもの時代の付加体が形づくったのが、今の四国の姿なのです」

プレートは四国に対してやや斜めに沈み込んでいるため、西予市の東では隆起して山が高くなっていくのに対し、西では沈降してリアス式海岸が発達しています。

肱川の上流域にあたる西予市には、約2億年前の中生代・ジュラ紀の地層「秩父帯」が主に分布しています。さらに、秩父帯のなかにはもつと古い約4億年前の古生代の地層「黒瀬川構造帯」(注1)が存在します。

黒瀬川構造帯は、肱川の支流名に由来する黒瀬川地域で初めて本格的な調査が行なわれたことからこの名がつけられました。高橋さんが「道の駅きなはい屋しろかわ」のそばを流れる黒瀬川を案内してくれました。この上流では4億年以上前の古生代のサンゴ類や三葉虫の化石が発見されているそうです。そして河原の岩には、ジュラ紀の厚歯二枚貝やサンゴ、ウミユリ、ウニの仲間などの化石をたくさん

見ることができました。

「肱川は、地質や地形、大地の動きなどが相互に影響しながらできたと考えられるのです」(高橋さん) 気の遠くなるような長い年月を経てつくられた複雑な大地のため、直線的に海に向かうおうとしてもそびえる山に行く手を阻まれ、肱川は流路を変えざるを得なかった。それで「遠回りする川」となったのです。

坂本くんは「高橋さんの言葉でもっとも印象深かったのが、『地球の動きが山や川の大地を形づくり、そこに雨が降り土砂が積もり、植物が芽吹き生物が生息して、地域特有の気候風土となる。その環境で人が生活するので、特色ある文化や歴史が生まれる』ということ。暮らしは何層もの環境の上に成り立っていることを、ジオパークの観察を通して実感しました」と言いました。

(注1) 黒瀬川構造帯
九州から四国、関東まで続く日本列島最古の地層。かつて存在した Gondwana 大陸の一部とも考えられている。

(注2) 地理的表示 (GI) 保護制度
長年培われた生産地の特性によって、高い品質と評価を獲得した産品の名称 (地理的表示) を知的財産として保護する制度。

伊予生糸を育んだ霧と伏流水と肱川

山を迂回するように流れる肱川の本流。その上流部には野村盆地、中流部には大洲盆地があり、ともに養蚕と蚕糸（生糸）業が盛んでした。平安時代にはすでに産地だったという説もあります。

なかでも「伊予生糸」と称される伊予市野村町産の生糸は、古くから伊勢神宮や皇室の御料糸、能装束の復元などに用いられ、2016年（平成28）2月には地理的表示（GI）保護制度（注2）に登録。この背景には、肱川流域ならではの地形と水の影響がありました。

野村盆地にある「西予市野村シルク博物館」を訪ね、館長の亀崎壽治さんにお会いしました。野村町で本格的に養蚕が始まったのは1870年（明治3）。翌年には製糸技術が導入され、明治後期から大正期には製糸工場が多数つくられたそうです。

「『いい生糸』は『いい繭』があつてこそできるものです。肱川流域は霧が深いので、蚕のエサである桑の生育がとてよいのですよ」

訪れた日の午前中、この一帯は

深い霧に包まれていました。「いやいや、今日はマシな方です。ふつうは昼ぐらいいまで霧が晴れないんですよ」と笑う亀崎さんは、伊予生糸を育んだ二つめの条件に「伏流水が豊かなこと」を挙げました。

「繭を湯や蒸気で柔らかくして、糸が切れずに繰りとれるようにする『煮繭』。そして繭の糸を何本か合わせて1本の生糸にする『繰糸』などの作業で、製糸工場は大量に水を使います」

そして三つめの条件は肱川そのもの。亀崎さんは「下流の大洲盆地に蚕糸工場があったので、繭を筏に載せて肱川を下ったこともあったそうです」と言います。当時、繭は相場制で養蚕農家の経営が安定しなかったため、「自分たちで糸もつくりよう」という声が町民からあがり、野村町に製糸工場ができたそうです。

シルク博物館に隣接する「絹織物館」の製糸所では、西予市内の養蚕農家が生産した繭が持ち込まれ、多条操糸機という機械で今も生糸を生産しています。操業している蚕糸工場は全国で五つのみ。西日本ではここだけです。

「生糸の触り心地と輝きは高級感



西予市野村シルク博物館館長の亀崎壽治さん



- 1 シルク博物館に隣接する「絹織物館」の製糸所で働く繰糸工（そうしこう）の井関奈央さん。手にするのは出荷前の「伊予生糸」
- 2 野村町内の養蚕農家が育てた繭。羽化させず、逆に死なせないように6～7℃の冷蔵庫で保管することによって質のよい糸がとれるという
- 3 製糸所の多条操糸機。同時に16本の糸をゆつくりと引く



があり、できあがった生地を見ると日本の近代化を牽引したことが納得できます。製糸業は良質な水と地形、霧の発生しやすい気候が重要です。肱川流域のように製糸業が発達したところには、同じよ

うな条件がありますね」と坂本くんは話します。

心の強い子を育てる「肱川あらし」

滔々と流れる肱川を横目に、野村盆地から中流部の大洲盆地へクルマで移動します。河口から15〜20km付近に広がる大洲盆地の面積は約10km²。秋から冬にかけて、この大洲盆地で発生した霧が一気に河口から瀬戸内海（伊予灘）に向かって吹き抜ける現象が「肱川あらし」です。大洲市立大洲南中学校の校長を務める松井康之さんはこう説明します。

「放射冷却と周囲を囲む標高の高い山々で冷やされた空気が大洲盆地に流れこんできます。一方、地上は水田が多いため快晴時は気温が上がり飽和水蒸気が発生するので、冷たい空気と水蒸気が混ざり合って霧になるのです」

盆地なので風が吹かず、霧はそのまま朝まで溜まります。ひどいときは50m先が見えないほど。ただし、それだけでは風速20m/sという「肱川あらし」にはなりません。ポイントは、肱川が200





「肱川あらし」について説明する大洲市立大洲南中学校の校長、松井康之さん。「大潮で、しかも満潮が朝の日にもっとも雄大な『あらし』が見られます」

万年かけて削りつづけた河口部の地形と温かい海水です。肱川は河口に近づくにつれどんどん川幅が狭くなる「とても稀な構造」（松井さん）なのです。

「河口部は両岸に900mほどの高さの山がそびえています。ここは三波川変成帯さんぱがわへんせいたいという地質で、今も一年に1mmほど隆起しつづけている。しかし、肱川は山が隆起する前からあったので、水の流れて削りつづけています。これを『先行性河川』といいます」

盆地に溜まった冷えた霧の出口は狭い肱川しかない。そして海水温は0℃以下にはならないので、温度差＝圧力差ができる。それによって風が強まり、霧は肱川から一気に海へ向かう——これが「肱川あらし」の発生メカニズムです。

「霧がまるで龍のように降りてきて、海に出たとたん急上昇するすごい光景なのですよ」と松井さん。大洲盆地の子どもたちは、台



河口付近の右岸から見た「肱川あらし」。真ん中に架かるのは「長浜大橋」。現役で動く日本最古の道路可動橋で、国の重要文化財に指定されている 提供：大洲市役所 長浜支所

左岸の高台から望む肱川と長浜地区。帆船がひしめく様子から往時の賑わいが見える 提供：大洲市役所 長浜支所

「河口の長浜地区の人たちに『明日、肱川あらしは起きますか?』と聞くと、皆さん楽しそうに予想し合っていました。洗濯物の乾き具合（日照時間）、散歩のときの風の冷たさ（気温）、漁に出たときの海の様子（波浪）など、日常の経験則に裏付けされた予報力をもつ

風並みの強風と、体が濡れるほどの冷たい霧のなかを歩いて学校に來ます。松井さんは「これは心が強い子どもになるはずだ」と思うそうです。

坂本くんはドローン（無人航空機）を持参するほど「肱川あらし」を楽しみにしていましたが、取材中に遭遇することはできませんでした。





坂本くんがドローンで撮影した肱川中流部。手前から奥に向かって流れている。河口に向かうと両側に山が迫ってくる 撮影：坂本貴啓

暴れ川・肱川との共生を目指して

ています。『肱川あらし』は生活の一部なのだと思えました。今回は肌で感じる事ができませんでしたが、もう一度この時期に来てみようと思います」（坂本くん）

きました。



国土交通省大洲河川国道事務所調査課長の高島愛典さん



国土交通省大洲河川国道事務所河川調査係長の朝山千春さん

クルマでの移動中、坂本くんが「上流なのに、まるで下流のように滔々と流れていますね」と口にしたように、肱川は勾配がゆるい川です。しかも河口が狭いため、この流域は常に洪水に見舞われて

大洲盆地を含む河口から20km付近まで管理する国土交通省大洲河川国道事務所、調査課長の高島愛典さんと河川調査係長の朝山千春さんに話を聞きました。

する中流の大洲盆地を守ると、勾配がゆるく河口が狭いため、下流の洪水被害が大きくなる危険があることです。

そこで「先の下流から堤防整備に着手しながらも、上流の洪水はダムで抑える」（高島さん）という二段構えで臨んでいます。

例えば、両岸に山が迫る下流部に通常の堤防は築けないので、「集落そのものを嵩上げ」する日本初の「宅地嵩上げ事業」なども19

85年（昭和60）から進めています。また、中流の堤防を先に完成させてしまおうと下流が氾濫する恐れがあるため、中流の堤防は段階的に高上げていく暫定的な堤防も7カ所で整備しました。

肱川流域の人々は洪水被害をたびたび受けていますので「防災への意識がとて高い」（高島さん）。

自治会で年配者が若い人たちに洪水に関する説明会を開いたり、防災訓練を行ったりしています。

肱川は住民に大きな被害を加えずが、「恵み」をもたらしてきたことも事実です。「肱川あらし」の解説をお願いした大洲市出身の松井さんはこう言いました。

霧のおかげで養蚕と生糸の産地となり、霧と洪水が運ぶ肥えた土のおかげで大洲盆地はハクサイなど葉野菜の生産が盛んです。そして今、「肱川あらし」を観光資源にしようという動きも出てきました。

大地の隆起と沈降によって遠回りする肱川。今も大地を削りながら、さまざまな恵みを流域にもたらしめています。

（2016年11月19～21日取材）

ますが、「恵み」をもたらしてきたことも事実です。「肱川あらし」の解説をお願いした大洲市出身の松井さんはこう言いました。

川名の由来【肱川】

ひじを曲げたように曲流していることが挙げられる。また、比志城（大洲城）の築城の際に人柱となった「おひじ」という女性の名をとったという伝説もある。

肱川

水系番号	: 86	
都道府県	: 愛媛県	
源流	: 鳥坂峠 (460 m)	
河口	: 瀬戸内海	
本川流路延長	: 103 km	51位 / 109
支川数	: 474 河川	5位 / 109
流域面積	: 1210 km ²	55位 / 109
流域耕地面積率	: 8.4 %	63位 / 109
流域年平均降水量	: 1631 mm	69位 / 109
基本高水流量	: 6300 m ³ /s	49位 / 109
河口の基本高水流量	: 7747 m ³ /s	53位 / 109
流域内人口	: 10万 4031 人	71位 / 109
流域人口密度	: 86 人 / km ²	73位 / 109

（基本高水流量観測地点：大洲（河口から18.8km地点））
 河口換算の基本高水流量 = 流域面積×比流量（基本高水流量÷基準点の集水面積）
 データ出典：『河川便覧 2002』（国際建設技術協会発行の日本河川図の裏面）

【開催報告】 <http://www.mizu.gr.jp/bunkajuku/houkoku/>

第25回里川文化塾

Webで公開中!

おしじょう

忍城の水利用

ミツカン水の文化センターでは、2011年度から「使いながら守る水循環」を学ぶため、「里川文化塾」を年に数回開いております。

第25回目は、小説および映画『のぼうの城』で一躍有名になった「忍城」を舞台に開催しました。

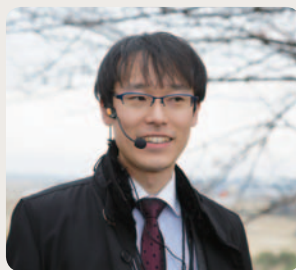
忍城は、沼地のなかの地形を巧みに活かして建設され、室町時代から明治初年にかけて存在した城。北武蔵の成田氏が築城したとされ、水郷のなかに点在するその様はまさに要害だったそうです。

行田市郷土博物館の学芸員・澤村^{さわむら}怜^{れい}薫^{かほ}さんを講師に迎え、豊臣秀吉の命を受けた石田三成による「水攻め」にも屈しなかった「難攻不落の城」を舞台に、井戸や水場など「城にかかわる水利用の知恵」について学びました。

また、忍城のように平地にある「平城(ひらじろ)」と、戦国時代に一般的だった「山城(やまじろ)」では、それぞれどのように水を利用・管理していたのでしょうか。城郭における井戸の場所や数といったことにも触れておりますので、ぜひご覧ください。



忍城の本丸跡に建てられた三階櫓（模擬）と堀



講師 澤村^{さわむら}怜^{れい}薫^{かほ}さん
行田市郷土博物館 学芸員

日時：2016年11月27日（日）
9:30～17:00 ごろ
フィールド：埼玉県行田市
講義会場：行田市郷土博物館
(埼玉県行田市本丸 17-23)
参加者数：32名
主催：ミツカン水の文化センター
協力：行田市郷土博物館



丸墓山古墳を上る参加者



古墳の頂上から忍城方面を眺める



埼玉県指定史跡の石田堤の遺構

【水の風土記 最新インタビュー】 <http://www.mizu.gr.jp/fudoki/>

Webで公開中!

生きものの進化から考える「ヒトと水」の関係



遠藤^{えんどう}秀^{しゅう}紀^きさん
東京大学総合研究博物館 教授

魅力あふれる独自の「水の文化」を培っている「人」や「事・場」を訪ね、研究や活動をホームページで発信する「水の風土記」。機関誌の特集テーマではなかなかお会いできない「人」や「事・場」を定期的にご紹介しています。

人にフォーカスする〈水の文化 人ネットワーク〉では、「遺体科学」を提唱する東京大学総合研究博物館 教授^{えんどうひでき}の遠藤^{えんどう}秀^{しゅう}紀^きさんにお話を聞きました。

世界で初めてパンダが「7本指」であることを発見した遠藤さんの目から見た「ヒトと水」の関係とはどのようなものなのでしょうか。どうぞ一読ください。

機関誌「水の文化」54号に関する訂正とお詫び

「水の文化」54号の記事について誤記がありましたので、お知らせいたします。

p12「薩摩藩」本文2段目1行目

誤) 曾木川治水工事
正) 木曾川治水工事

訂正してお詫びいたします。

水の文化 Information

■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌「水の文化」では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。

<http://www.mizu.gr.jp/>

■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページからPDFファイルとしてダウンロードできるほか、冊子をご希望の方はホームページの「最新号のお申し込みボタン」からお申し込みいただけます。どうぞご利用ください。

■里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで

里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。今後の企画についても、順次ホームページでご案内します。ご注目ください。

皆さまの感想を お待ちしております！

『水の文化』55号について、アンケートにご協力ください。
今後の機関誌をよりよくしていくための参考にさせていただきます。

◆アンケートへの回答はこちらから。

<http://www.mizu.gr.jp/form55.html>



※アンケート用紙をお持ちの方は、FAXまたはメールにて
下記へご返信いただく形でも結構です。

FAX : 03-6685-7596

メールアドレス : tokyo-office@mizu.gr.jp

編集後記

S P Q R、桃太郎ジーンズ、B U A I S O U、今回訪ねた現場にはストーリーがあった。藍色の魅力にも惹かれたが、それに関わる人と物語を知るとよりその価値がわかった。商品としては高めたが、そこに秘められた想いと技を知ると納得できる。さて、今号はそこまで伝えられただろうか。(後)

色をテーマにした初企画。色と文化の密接な関わりに驚き、浮世絵が海外に与えた真の影響に驚き、染という先人達の知恵と工夫に驚いた。色は深くて面白い！日本でしか出せない「藍染め」の色にもっと関心を寄せたいなと思いました。(松)

私にとって、一番身近な藍は食器だ。昔も今も、愛用している食器には白地に藍のものが多かった。藍はいつでも、さり気なく日常を彩ってくれる、とても身近な色だと思う。この藍への親近感がこの国独自の感覚だと知り、日本人で良かったと改めて感じた。(原)

「これ貸して」と言って娘が手に取った洋服は、藍色のGジャンだった。15年前に私が着ていた、藍色のGジャンは、「この色いいよね！」と言って持っていた娘が、今着ている。藍色は月日が流れても、色褪せることがない色なのかもしれないと思った瞬間であった。(吉)

伝統的なものづくりはどれも手間と時間がかかる。手業が最大の魅力なのだから、仕方のないことだ。しかし、先人たちの知恵と手業を踏襲しつつも、現代の技術をうまく取り入れ、工夫を重ねながら挑戦している若者たちに出会えた。「藍」の未来を感じるとても有意義な取材だった。(力)

今いちばんのお気に入りには、徳島の天然藍で淡く染めたタオルマフラー。首元に巻いて出かけて「これ、自分で染めたんですよ」と言う、「ウソでしょ!？」と驚かれるのが結構楽しい。でも服装には無頓着なので、藍色を活かすコーディネートがわからないのが悩み。この春、藍染めのおかげでオシャレが目覚める、かも？(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第55号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中塾ビル 4F

株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ

ミツカン水の文化センター 事務局

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町 1-11-3 中銀 NM・5F

Tel. 03 (6264) 9471 Fax. 03 (6685) 7596

発行日

2017年(平成29)2月

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 大手前大学学長
中庭光彦 多摩大学教授

制作

後藤喜晃
松本裕佳
小林夕夏
原田朱野
吉田奈保子

編集製作

前川太一郎 編集
中野公力 デザイン・撮影

執筆

佐々木 聖 (pp.20-23, pp.32-34)
手塚ひとみ (pp.12-14)
開 洋美 (pp.24-31, pp.38-39)
前川太一郎 (pp.6-11, pp.15-19, pp.45-49)

撮影

大平正美 (pp.20-23)
川本聖哉 (pp.4-5, p.8, p.11, pp.28-29, p.31)
鈴木拓也 (p.11, p.13, pp.15-19)
中野公力 (p.33, pp.45-49)
藤牧徹也 (pp.6-7, p.11, pp.24-27, p.30, pp.38-44, p.50)

印刷

中塾総合印刷株式会社

※禁無断転載複写



ミツカン水の文化センター

表紙：染め場で藍色に染め上げられたストールが柔らかな光に透ける。寛政年間（1789-1801）創業の紺屋「日下田（ひげた）藍染工房」は、タデ科の一年草「蓼藍（たであい）」の葉からつくった染料「染（すくも）」を発酵させて染めるという、昔ながらの方法を今も守る（撮影：川本聖哉）

裏表紙上：染をつくる土間の作業場「寝床」で、発酵を促すために水をかけるBUAISOUの結城研さん。4～5日ごとに水をかけて混ぜ合わせては積み上げる「切り返し」など、染づくりにはさまざまな手作業が必要だ（撮影：鈴木拓也）

裏表紙下：ペロ藍（プルジャンブルー）という人工絵の具が大量に輸入されるようになった文政年間（1818-1830）、藍色の微妙な濃淡で刷る「藍摺絵（あいずりえ）」が登場する。歌川国貞「元柳橋 雪の光景」（北海道近代美術館蔵）

